
直死の魔眼の兄の伝説

ライナ・リュート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

直死の魔眼の兄の伝説

【Nコード】

N1139S

【作者名】

ライナ・リユート

【あらすじ】

ライナリユートの兄の物語です。直死の魔眼を知らなくても伝説の勇者の伝説を知らなくても読めるように説明を入れていくし、伝説の勇者の伝説の原作通りに進めていき、変えていきますのでみなさんぜひぜひ読んでみてください。不定期更新になります。

01（前書き）

一話目や最初の方は伝説の勇者の伝説の原作通り進めます。

一応主人公はライナの兄なのでご了承ください。

まだ本編とはあまり関わってきません。最初出てますがちゃんと登場するのはもう少し後になります。

「ライナ。俺は逃げる。お前はローランド帝国王立軍事特殊学院へ行け」

「兄さんはどこに行くの？」

そう猫背の眠そうな顔の少年が言った。

「俺は・・・とりあえず国を出ようと思っている」

「じゃあネルファへ？」

「さあな？けどこれだけは覚えておくんだぞ？兄さんはライナの味方だ。困ったときは俺を呼べ。俺はライナだけは守る。絶対にな」

そう言つてライナに似た、違うところは髪の色が金髪の男はライナに背を向けどこかに行った。

？
？
？
？

「ああゝだるい。眠い・・・」

ここはローランド帝国王立軍事特殊学院。

孤児やA級犯罪者の息子など社会から排除された者が集まる所。そうは言っても戦争などに真っ先に連れて行かれるだけだが。

まあみんなは自分を軍に高く売るために自分を磨いている。

寝ばけた少年、ライナ・リュートはこの生徒で今は演習の時間。

「ああゝもうライナってなんでやる気が無い訳？」

赤毛のショートカットに赤い瞳の少女キファ・ノールズが話しかける。

「だるいから……」

「もう！ 行くわよ」

「だめ」

それでもキファは手を止めない。

キファは光の魔方陣を空中に描き始める。

唱えようとしているのはローランド特有の魔法『稲光^{いづち}』だ。

『求めるは雷鳴>>>稲光』

すると魔方陣の中央に小さな光源が生まれ、ライナに向けて放たれる。

「うわぁゝこれ喰らったら死ぬかも……」

ライナは避けようとしなかった。

すると『稲光^{いづち}』が当たり全身を感電させた。

「ライナア？ なんで避けようとしないの？」

そう言い心配そうにキファが近づいてくる。

「ああゝ俺死んだから……」

直後。

「死人は喋らないわよ」

と頭を叩かれた。

すると周りがザワザワし始めた。

「いい加減にしてくれよ。俺たちの価値まで下がってしまうじゃないか」

なんてライナを侮辱しまくっている。

「いい加減にしないか…」

そう言い近づいてくるのはシオン・アスタール。

銀色の長い髪と金色の瞳が印象的な好青年だ。

しかも成績は学年トップ。全員の中心人物で貴族の出の少年だ。

なぜ貴族の少年がいるのかという疑問が浮かび上がるがライナはそんなこと気にならないという風に欠伸をする。

するとシオンとライナに暴言を言っていた人が話している。

組手をするようになったのか戦い始めた。

「ライナ。ちゃんと見ときなよ」

圧倒的だった。

三人も居たのにシオン一人に簡単に倒されてしまっていた。

シオンは服をパツパと払い、こっちに近づいてきた。

少し話をする^とシオンはとんでもないでもないことを言ってきた。

「キファ、ライナ。僕たちの仲間にならないか？色々と有利になるよ？」

「けどシオンさんは優秀な人を集めてるんでしょ？」

「君は十分優秀だと思うよ」

「けどライナは……」

「そうそう。俺は優秀じゃない。欲しいのはキファだけだと思うけど……？」

キファは声に詰まる。

「僕は心の底からライナにも来てほしいと思ってるよ」

そしてライナの耳元に口を近づけて言った。

「君の目が気に入った。『アルファ・ステイグマ複写眼』保持者のお前が欲しい」

「ってえ？何言ってるの？俺はそんなの知らな……」

「謙遜しなくてもいいよ。実力を隠しているのは知ってるんだ。孤児院に行つてまで調べたんだから」

ライナは何も言えなかった。

「ライナ。俺の下に来ないならばらすよ。そうしたらどうなることか分かっているだろ?」

「知ってて欲しいのか?」

「ああ。俺が欲しがらないと誰も欲しがってくれないからな」

「脅すとか……お前悪魔だろ?」

「お互い様だ。じゃあよろしくな」

そう言い残しシオン・アスタールは去って行った。
その後ろ姿を見つめて、

「何の話してたの?ライナもシオンの仲間になったのよね?」

「ああ」

そつめんどくさそうに言った。

01（後書き）

どうだったでしょうか？

お気に入り登録、感想等待っております。

02（前書き）

2話です。

「ああゝもう気持ち悪い……俺って酒あんまり飲めないのに……」

今日の模擬戦闘訓練でライナ達の班はシオンの指揮により最短記録をたたき出した伝説の班としてそれを祝おうとシオンの仲間が集まり飲み会が催されていたのだ。

「もうシオンとか最悪だぜ……俺のあだ名がマダムキラーになっちまったよ」

「ははは……弱みでも握ろうと考えているのなら言っておくけど俺に弱みはないよ」

シオンがライナの顔を覗き込むように言った。

「出たなこの悪魔が!!」

それにシオンは苦笑し言った。

「全員俺が酔い潰してきた。残っているのは俺とお前」

「もうみんな寝たのか……」

「で話があるんだが？」

「なんだよ」

「お前が育った孤児院、ローランド三〇七号特殊施設は名目上戦争

で孤児になった孤児を一人で生きていけるようにする施設だが実質は違う。才能がある子供に徹底的に軍事教育をして才能が示せぬ子どもは処分され生き残った子供は貴族に売られるか戦争に投入される。そこでお前は育った」

「ああ」

そこでシオンは続ける。

「だが戦争が終わった。しばらくは施設はあつたが戦争がないとその施設は犯罪以外の何物でもなくなる。だからお前は一つの選択肢を迫られる。これからの人生、軍部の管理下に置かれるか、口封じに殺される。お前は前者を選びここに来た。そうだな？」

そこでシオンは一呼吸置き言った。

「お前はここに来たがお前の兄、グラナ・リユートは後者を選んだ。いやお前の兄は最初からどちらも選んでいなかった。殺される前に逃げた。違うか？」

「兄さんの事まで調査済みって事か……」

「なあライナ」

「何だよ」

「お前はこのローランドという国に復讐したいと思わないか？」

「はあ？ 復讐？」

「そうだ。この腐りきった国を叩き潰そうと思ったことはないか？
『複写眼』というだけで忌み嫌われ差別される。平等じゃない、
弱者が虐げられる国。争いをやめようとしないう国。愚かな国王とそ
れに輪をかける愚かな貴族に復讐したいと思わないか？」

「何言ってるんだよ。そんな事言ってるのと殺されるぞ？」

「だろうな。けどこの国を恨むお前は言わない」

「めんどくさいからだよ」

「とにかく俺はすべてを変えてやる。今ここで仲間を集めているが
やめだ。十分戦力は集まった」

シオンは両手を広げ言った。

「俺が王になってすべてを変える。ライナ、俺についてこい。お前
の望む世界を創ってやる」

シオンの顔は自信がみなぎり、鋭い瞳からは強い意志が宿ってい
た。

シオンは英雄になるための要素をすべて持っているように見えた。
そんな夢物語を現実にしてしまいそうなのにかがシオンから放た
れていた。

「じゃあ昼寝をした奴が出世する法律作ってくれよ」

「ははは。俺はそこが気に入ったのかもな。『複写眼』など関係な
く」

するとライナの眼がシオンの後ろの黒ずくめの服を着ている数人の男を捉えた。

男たちは空中に光の魔方陣を描き始めていた。

「なんだ？ こいつら」

その時にはシオンは動き始めていてライナの襟をつかみ逃げ出す。

「走れ！ 殺されるぞ」

「なんで？」

「説明は後だ！ 逃げろ」

するとライナはシオンの走る勢いを殺さないまま立ち上がる。その行動は劣等生の動きとは到底思えない。

「ここを曲が……」

言いかけていた瞬間光が放たれる。

光は魔法だ。

殺傷能力の高い魔法。『光^{くわう}燐』だ。

「飛べっ！」

二人はなんとか煉瓦造りの家の細い隙間に潜り込んだ。すると強烈な光が弾けた。

それはとんでもない破壊力だった。

殺すつもりで放たれた魔法。

「シオン・アスタールはあそこだ。殺せ」

男の一人が言った。

「巻き込んで悪かったなライナ。お前は逃げる」

「お前は どうする？ 倒すのか？」

「いや。とりあえず二手に分かれる。俺だけが狙われているんだ。お前は追われないからな。その後はなるようになる」

「じゃあ大丈夫だな。お前は王様になるんだったらこんなところで死んだらだめだぞ」

「ああ。じゃあな」

そう言い二人は飛び出した。
シオンは大声で言った。

「俺はこっちだぞ」

「いたぞ！あそこだ」

男たちは叫び追いかけた。

ライナはそれを後ろから見ていた。

「生きてろよシオン」

そう言いライナは後ろを向き帰ろうとした。
だがその時！

「お前は誰だ！ シオン・アスタールの仲間か？ なら口封じをしないと……」

「くそ！ まだ居たのか！？」

一人の黒い服に身を包んだ男は魔法をすでに完成させていてライナにはどうしようもなかった。

男が放った光の魔法、『光燐』がライナに直撃しようとしていた。

「へ？ 死んでない……」

『光燐』はライナに当たっていなかった。

「ライナ。大丈夫か？」

ライナの前に黒いマントを来た男が居て、その男が優しい、どこかで聞いたことのある声がライナに言った。

「なんで俺の事を知っている！」

ライナが言うも男はそれに答えず、とんでもないスピードで移動しライナに魔法を放った男を殺した。

「今はお前に会う訳にはいかない……じゃあなライナ」

そう言い男は闇に消えた。

「誰だったんだ……？」

そうライナは眩き少しの間ボーっとして、帰路に着いた。

「もしかして……」

その夜ライナは眠ることができなかった。

02（後書き）

見てくださってる方ありがとうございます。

誤字脱字等ありましたら報告お願いします。
お気に入り登録、感想等待ってます。

03（前書き）

三話です。

見てくださってる皆様ありがとうございます。

「どうする……？」

シオン・アスタールは路地裏を走りながらこの状況をどう打開するかを必死に考えていた。

敵は六人。

しかしどれも強く殺しのプロだという事はさっき攻撃を仕掛けた時に分かっていて。

一対一なら勝てる。それは間違いない事だった。

しかし六人。

プロに奇襲を仕掛けても無理。

正攻法など論外だった。

「くそ……だが朝まで逃げ切れればなんとか……」

そこでシオンは足を止める。

「がはは。ついにあきらめたか……手こずらせやがって」

「今、楽にしてやるよ」

などと追いついてきた男たちが口々に言っている。
だがそれでもシオンは後ろを振り向かない。

「ん——？　なぜ俺が逃げなければならない？　本当に王になれる器なら俺は死なないはずじゃないか」

そこでシオンは後ろを振り向いた。

「そうだ。ライナの言う通りだ。王になるならこんなところで死なない。むしろ貴様らやその後ろで偉そうに踏ん反りかえっている貴族^{あにき}たち程度、軽く踏み越えなければ……」

シオンの目は鋭く、体は低く低く、戦闘態勢に入って行く。

「まだやるのか？ 無理だよお前には。色男さん？」

下品な笑い声が響き、男たちは懷からナイフを取り出す。それにシオンは構わず、戦闘が始まる。

まずもの凄い速さで敵との間合いを詰め、一人を殴ろうとする。だが横から二人の男が襲いかかる。

それに殴るのはやめ、ローランドの魔法、『稲光』を構築する。

「させるか！」

そう言い男はナイフをシオンに投げつける。

それに魔方阵を描くのは解除して躲す。

だが後ろを見るとひとりの男が魔法を完成させていた。

そして男が呪文を唱えた。

「求めるは雷鳴>>>稲光」

訓練の時、キファがライナに撃った時とは違う、殺そうと思って放った稲光がシオン目がけ飛ぶ。

それにシオンは拾ったナイフをそれ目がけて放つ。

稲光は金属のナイフに当たり、雷を纏ったナイフが男に当たり、炸裂した。

「これで……ぐあっ」

後頭部に激痛が走る。

シオンは地面にひれ伏した。

だが自分になにがあつたかは把握できた。
男の一人が殴つたのだ。

「遊びじゃないんだぜ？ 色男さん」

「く……くそ……」

シオンは動けなかった。

ナイフが振り下ろされる。

それを見る事しかできなかった。

死が迫るのが分かった。

だがシオンは冷静だった。

冷静にそれを見る。

振り下ろされるナイフを、

が――

シオンの目に細い木でできた針見たいなものが……

それはナイフを振り下ろそうとしていた男の甲に突き刺さる。

「ぎゃああああ」

男は叫び、ナイフも落としてしまう。

「なんだこりゃあああ！！」

そこに綺麗な透き通るような声が響く。

「団子の串だ。みれば分かるだろう？」

淡々としていた。

ひどく無感情で人を突き放すような口調。

全員の視線が声のした方を見る。

そこで全員が息を呑み、言葉を失う。

信じられないほどの美女が立っていた。

彼女ははだんごを二本持っていて時折それに口を付ける。

そこで女が突然顔を赤らめて言った。

「最近では……堂々と男が男を襲う時代になったのか？ 大胆だな」

『はぁ！？』

見事にハモった。

敵と味方関係なく。

すると男の一人が声を上げた。

「お前がこの串を投げたのか？」

「それは食べ終わったからな」

「そういうことを言ってるんじゃないよ。ははは、こんなこととしてただで済むと思ってんのか？ へ、へへへ」

男たちが下品な声で笑う。

「じゃあ来い。相手をしてやろう」

片手にだんごを持ったまま腰に手を伸ばし剣を抜く。

「なめんなあ！」

男が一斉に襲いかかる。

すると女は消えた――

そう表現するのが一番近い気がする。

だが実際はあり得ないほどの速さで移動したのだった。

これは神速と呼ぶに相応しいぐらいの速さで。

そして彼女の持つ剣が閃いたと思うと男が全員地面にひれ伏していく。

「は？」

シオンを押えていた男も間抜けな声を上げる。

シオンも呆然として見る。

「お前もやるか？ 私は課題でこの区域での犯罪行為は許すわけにはいかない。もし続けるなら殺すぞ」

団子の付いた串をビシッと男に向けて言った。

「ひい！？」

そう言い仲間も見捨て逃げて行った。

だが未だにシオンは呆然としていた。

この女は……

この女はシオンを圧倒した六人の男をあっさり撃退してしまったのだ。

それも団子を食べながら片手間に……

ローランド王立軍事特殊学院ですべての事でトップに立っている
シオンでもまるで勝てる気がしなかった。

敵として対峙すれば瞬殺されてしまっただろう。
化物だ。

そこでシオンにある言葉が思いついた。

美しい神速の化物――

もしくは……

「んっ？ もう朝が明けるな」

それにつられシオンも空を見上げる。

確かに空が白みはじめていた。

そこでシオンは薄く笑った。

「やっぱり死ななかった」

そうだ俺は死ななかった。

死を覚悟した夜が明ける。

神がここで殺さないなら俺の天命はここにはない。

そしてシオンは目を女に戻した。

雲の切れ目から差す朝日が彼女を照らし出す。

ただでさえ美しいつややかな金髪がきらめいた。

その姿は……

化物じゃない。

女神か天使に見えた。

そこでシオンは女から視線を外し空を見る。

「ライナは無事かな……」

03（後書き）

ついに登場しましたね。

主要メンバーはやっぱりはやく出さないとね。

お気に入り登録、感想等待ってます。

04（前書き）

今回は今までよりちょっと長めに書いてみました。

ローランド帝国王立軍事特殊施設の教室では今、ライナ・リユー
トをクラスの男子全員が殺意のこもった目で睨んでいた。

「どう？　美味しい？」

そんな事に微塵も気づかないキファは同じく微塵も気づいていな
い先程まで寝ていた男、ライナにお弁当の感想を聞いていた。

「美味しい」

するとキファは輝くような笑顔で、

「ほんと？　よかった」

と言う。

その瞬間またまたクラスの男子全員に殺意のこもる目で睨んだ。
するとそれを遮るかのようにガラガラと言うドアを開ける音がし
てシオンが入ってきた。

「お、シオン。生きてたのか？」

「なんとかね……ライナは大丈夫だった？」

「俺の方もひとり来たけどなんか助けられた」

「誰に？」

「さあ？」

そう言いライナは首を傾げる。
まあ心当たりもあるのだが……
そこでキファが話に入ってくる。

「なんの話？」

「なんでもないよ」

そうシオンが笑顔で答える。
その笑顔は疲れが見える笑顔だった。

「ふん……」

「あ、そうそう。僕は今から行くところがあるから今日の集まりは行けないというつもりだったんだ」

「そう……分かったわ。みんなにも言っとくね」

そしてシオンは教室を出た。

それからしばらくした後シオンはだんご屋にいた。
そこでシオンは物思いにふけるように昨日のことを思い出していた。

「犬は一度恩を受けると一生忘れないという」

美女が無表情に言う。

「へ？」

それにシオンは意味が分らず間抜けな声を上げた。

「私が川で溺れていた犬を救ったでしょう。するとその犬はどうする？」

「恩返しをする？」

「そう。犬は三番地区のウィニットだんご店の『おすすめ詰め合わせセット四番』を私に届ける。犬は賢い。だんご屋でエリス家の美人に届けてと言えばちゃんと届くことをしているのだから」

そう言い無表情な顔の美女は去って行った。

そんな事を思い出し、シオンはウィニットだんご店で『おすすめ詰め合わせセット四番』を購入した。

だがエリス家の住所を聞いたりなどしない。

エリス家。

その言葉で女が何者か分かったからだ。

エリス家とは代々ローランド帝国王の護衛を務める一家。

大貴族だ。

王の護衛が任務だから戦争に参加したりしないからその武名はあまり知られない。

だが一部の貴族では有名だ。

彼らが最強だと。

貴族はエリス家の道場に通うのが一種の名家の証みたいになっている。

「ここか……」

シオンはエリス家の前に着いた。

彼の前には巨大な門がそびえ立っている。

ここではどんなことが待っているのか。

表舞台には登場しない、神秘的な一族。最強と称される剣士を生み出し続ける名家。

その門をためらう事なく叩いた。

「フェリス・エリスさんにお礼の品を届けにあがりました」

貴族名鑑で事前に調べた、昨日自分の命を救ってくれた恩人の名を口にする。

すると、なんの警戒もなしに門が開いた。
普通だ。

それがシオンが思った最初の感情だった。

いや、貴族の住まいとしては質素すぎるぐらいだ。

しかしシオンは気を引き締めた。

なぜか――

それは分らないが重く、暗く、深い闇が広がっている気がしたから。

シオンが通されたのは一つの道場だった。

馬鹿でかい規模を誇る道場。

向かいの壁が見えないほどの……

「道場では靴をお脱ぎください。では私は」

と案内役の老執事が去ろうとするのを慌てて引き留めた。

「私はどうすれば？」

「シオン様。エリス家を初めて訪れるお客様はまず当主に有って頂
く決まりがありますので……」

「誰もいません……」

そこでシオンは後ろを振り向いた。

殺気を感じたのだ。

獣の殺気。

そんなレベルじゃない、悪魔の殺気と呼べる代物だ。

人間の物ではないそう思うが……

そこで老執事が言った。

「当主様です。フェリス様のお兄様にあたります」

シオンはそれを心ここに在らずという感じで聞いていた。
まず道場の奥にいる男から目が離せなかった。

誰もいなかったはず……

いや違う。

シオンには分かった。

最初から居たんだ。

ただこの男が見られたくないから見えなかった。

この男にはそれだけのことなのだろう。

気配を完全に消し、人の意識からも消える。

「ふう」

そこで深呼吸し、切り替える事にした。

「シオン・アスツールと申します」

そこで頭を下げる。

すると男も澄んだ、だが不安を掻き立てるような声で言った。

「挨拶が遅れました。私はエリス家の当主をやっているルシル・エリスです。あなたはフェリスのお友達ですか？ 土産も持ってきてくれたようだね。フェリスが喜ぶ」

「友達という訳でもないんですが……昨日、フェリスさんに助けられて」

「ああ。フェリスはちゃんと課題をこなしているようですね」

「課題？」

「ああ。あの子がここの所暇そうだったのであの地区での犯罪行為を一定期間ゼロにしろと命令しておいたので」

「ゼ…ゼロですか」

「そんなことより順番が逆になってしまいましたか、ようこそエリス家へ。君は面白い人だ」

そう言い静かな顔をした。

妹と同じように異様なまでに整った容姿の青年が笑いかけながら言った。

「よく分からないけど気に入られた……のかな？」

するとにつこりルシルが笑う。

その笑ったまま、ルシルは全身から殺気を噴き出した。
シオンに向かって。

「ぐう……」

とんでもない圧力。

気を抜くとそれだけで死んでしまいそうになる。

動けない。指一本と。

動けば殺される。間違いなく。

「ははは……君はやはり面白い。今自分がどんな顔をしているか気づいていますか？」

ルシルが目を閉じたままにこにこ笑いながら言った。

「何の事だ」

口調が本来の物に戻ってしまっていた。

いや本性を引き出されと言っべきか――

それもあつさりと。

それにルシルは続けた。

「君は笑っている。私はその気になれば君が気づく前に殺すことができるの理解しているのに君は笑った。恐れがなかった？ いやそれは違うな。君は恐怖した。圧倒的な死を。しかしそれ以外の感情がある。それはなんでしょう」

考えるようにルシルは言葉を止める。
それからすぐにこう言った。

「そうか。君は私が、いやすべてが欲しいんだ。そういう目だ。君が望むのはこの国の……」

「な……」

シオンは目を見開いた。

すべてが見透かされている。

本当に見透かされているなら確実に殺される。

このルシルはエリス家なのだ。

エリス家は王に仕える一家。

ということは……

圧倒的な死を感じた。

そこでルシルが立ち上がった。

その顔には笑みが浮かんでいる。

動けなかった。

恐怖した。

あまりの実力の差を感じて。

そしてルシルはシオンにゆっくり近づいて行く。

ルシルはシオンの前で止まると言った。

「違う。君が望むのはずっとずっと先。本当におもしろいなあ。ここで殺そうか。それとも生かしておこうか。どっちにしよう。殺すか生かすか。それは今、私の手の上にある。はははははははは」

笑顔だった。

ずっと笑顔。怖いくらいに。

そして手を出してくる。

男の物にしては細く、華奢な手。

その手には絶望が、死が宿っていた。

それがシオンの首に触れようとした瞬間。

「おい」

そう後ろから声がかかった。

聞き覚えのある、透き通るようなきれいな声。

「私のだんごに何をする気だ」

そこにはフェリスが居た。

瞬間、ルシルの顔に浮かんでいた笑みが消えた。

「フェリス。君が昨日助けたシオン君が君にだんごを届けてくれたぞ」

「それは知っている。だが兄様は何をしようとしていた？」

「男同士には色々あるんだよ。本当に聞きたい？」

「お、男同士……？」

フェリスはそこで顔を赤らめて言った。

「あえて聞かないでおこう」

「おい。誤解してないか？」

シオンはそこで全身の緊張を解いた。

ルシルの殺気は嘘のように消えていた。

全身汗でびっしょりと濡れていた。

そこでルシルはさっきと違う、おだやかな微笑を浮かべて小声で言った。

耳元で囁くように……

「君は生き残った。それは君の力だろう。ならば私は二度と手を出さない。フェリスと仲良くしてやってつくれ。ああ見えて両親を早くに亡くしたせい寂しがりやなんだ」

そう言ってからルシルはフェリスの方を向き言った。

「フェリス。課題はちゃんとこなしているようだね。そろそろ次のステップに移ろうか」

するとフェリスが、

「最近思っただが兄様。兄様は自分がおもしろいと思ったことを課題にして私に押し付けてないか？」

「なにを言うんだ妹よ。これはエリス家に伝わる修行じゃないか。私を信じる」

「分かったよ……次の課題はなんだ？」

するとルシルはシオンを指差し言った。

「これからしばらくシオン君の手伝いをしろ。彼の周りにいれたい修行になりそうだから」

「え？ それって」

「君は不満かな？ シオン君」

「いやそうではないんですが」

それどころか願ってもない話だった。

どうにかしてフェリスを仲間に入れたと思っていたのだ。
それがこんな形で手に入るとは……

そしてフェリスを見た。

「仕方ないな」

そうしてフェリスがシオンの仲間になった。

その事実にはシオンは軽く笑みを浮かべた。

04（後書き）

とりあえずシオンの話は後少し書けば終わりますね。
主人公のライナの兄の出番が少なすぎますね。今。

ライナの出番も少ないし……

まああと少しで本格的に登場となります。

お気に入り登録、感想等待ってます。

誰か感想くれよう

05（前書き）

またシオンがメインの話になった……
主人公が5話でまともに登場していない小説なんてこれぐらいの物
じゃないだろうか……

「ねえライナ。最近シオンの顔色悪いと思わない？」

「そうかなぁ？」

「そうだよ。毎日シオンに会ってて分かんない？」

「いや、俺、秘密にしてたけど会議の時、寝てるんだ」

「知ってるわよ！　ってかあんたいつも寝てるじゃない。それよりシオンの事。ほんとに最近顔色悪いのよ。悩み事でもあるのかしら？」

「知らね」

「仲間が悩んでいるのに？」

「けど俺達が立ち入る問題じゃないだろ」

「そうだけど……」

なんてことをこの部屋にもシオンがいるのに話している。
それを聞いてシオンは苦笑いをした。

「そんなに僕の顔色悪いかな？」

シオンを囲むように座っているタイル、トニー、ファルに聞いた。
そして三人は一樣に頷き、タイルが言った。

「どうしたんだよシオン。悩み事か？」

それに続きトニーが、

「我々に解決できる問題なら相談してくださいね」

最後にファルが目を輝かせて言う。

「恋でしょ？ 恋なんでしょ？ 恋人が出来たんでしょう？ いやあ。だから毎日寝不足？」

「まじかよシオン！ 俺たちに黙って抜け駆けを？ どうするトニー？」

「決まってるじゃないかタイル。許すわけにはいかん。裏切り者には死を！」

トニーが拳をボキボキと鳴らす。
そんな会話。

変な誤解をされ危険が迫ってるようなので弁解を始める。

「ははは。違うよ。いろいろ事情があつてな。心配かけたみたいだね。じゃあとりあえず僕は顔を洗って来るよ」

そう言い席を立った。

そして顔を洗い眠気を覚ます。

「これだけ眠れないとしんどいなあ」

そして溜息を吐く。

寝不足は間違いないのだ。

そしてシオンはまったく眠れなくなったあの夜の事を思い出す。

その日は図書館で調べ物をしていたシオンは寮の個室に戻ってすぐにベッドに横たわった。

そしてそのまま眠りに着こうとしたら突然天井からガタンという大きな音が聞こえた。

すぐにシオンは体を起こし身構え、天井を見据えるが変化はない。しかし……

あきらかに気配が潜んでいた。

刺客か？

「くそ」

シオンは呻いた。

今度の資格は相手にまったく気配を気取られないほど気配を断つことができるのだ。

前の刺客よりあきらかに強敵。

こんな学院内の寮に直接攻撃を仕掛けてきている。

ここでシオンはにやりと笑い、戦闘態勢に入って行った、

そこで天井の板が外れ人が姿を現した。

「じゃーん。イリスちゃんでした！」

元気いっぱいな声でシオンに笑顔で話しかけた。

イリス・エリス。

その名から想像できるようにエリス家の人間だ。フェリスやルシルの妹。

見た目は六、七歳くらいの女の子。

フリルのたくさんついた、ドレスのような服に身を包む少女。

兄や姉と同じように整った容姿からは、将来はどうやっても美人に育つだろうと予想できる。

そのかわいらしい容姿とは裏腹に単純な体術だけならこの学院一の実力の持ち主のシオンでさえ敗れる実力の持ち主。

その姿を見てシオンがしばらくの間、無言だった。
すぐに気を取り直していった。

「エリスちゃんか……なら気配を断つぐらい楽勝だよなあ」

戦闘態勢に入った反動からどっと体に疲労を感じながらシオンはベッドに腰を下ろした。

そんな事はおかまいなしにエリスが輝くような笑顔をシオンに向けて言った。

「ねえお兄ちゃん。寝ちゃダメだよー。エリス楽しみにしてたんだから！」

「へ？ 何が？」

「エリス知ってるんだあら。お兄ちゃんは夜に野獣に変身するんでしょ？ 姉様言ってたもん。早く見せて。野獣」

「……野獣って……」

ちなみにその夜は人間の男は夜に野獣に変身して荒野を駆け抜けたりしないんだよ、ということを説明するのに朝までかかった。

次の日はフェリスが見張ってたりとその日からはまったく寝れなかった。

フェリス達がなにをやっているのかというトルシルの言いつけで仲間になったフェリスにシオンの命を狙っている貴族の割り出しを頼んでいるのだ。

しかしフェリスは一人でやるのはめんどらしくフェリスの妹、イリスを手伝わしているのだ。

シオンを見張って、その周りで不審な事をしている奴の後を付けて割り出すらしい。

まあそんなことが一週間続いた頃にはシオンは刺客に殺される前に寝不足で死にそうだとか言っていないながら慣れとは恐ろしいもので朝方数時間だけで必要な睡眠を取る能力を身に付けていた。

フェリスたちがシオンを監視し始めてはや一ヶ月。

ついに昨日、フェリスたちがシオンを尾けていた不審人物を発見した。

相手も警戒しているらしく黒幕とは接触していないらしいがそれも時間の問題だろう。

「やっと今夜からちゃんと眠れる……」

顔を洗い終わったシオンが布で顔を拭きながら言った。
そして仲間の所へ戻る。

そこにはいつものみんながいていつもの日常がある。

陰謀や、罠や、殺意や、憎悪なんて言葉は存在しない。

戦争も死も……

平和だった。ひどく平凡な毎日……

最近、思う事がある。

自分の野望や復讐は無意味なんじゃないかってこと。

自分を虐げてきた親や、兄弟に復讐し王になるという夢。

それはたくさんの人間を犠牲にする夢だ。

その夢ははたして必要なのだろうか？

ここにはすべて揃っているんじゃないか？

仲間と笑い、喧嘩してまた仲直りする。

これ以上なにを望む？

今が平和なら……

兄弟たちに復讐する必要も、俺が王になり国を変える必要もないんじゃないか？

シオンは仲間を見て、それから空を見上げた。

「俺が目指す場所は……」

とそこで突然、平和だった日々が壊れた――

「シオンさん!？」

別の班のシオンの仲間数人が血相を変え駆けてきた。

「大変な事が起こった！俺達死ぬかもしれない!」

興奮していた。

みんなひどく動揺している。

「静まれ！よしロル。なにがあったか話せ」

ロルと呼ばれたシオンの仲間が落ち着かない様子で告げてきたことは衝撃的だった。

「隣国のエスタブルがローランドの領土を侵したんです。また戦争になる。俺達も兵士として戦場に……」

それを聞いた人はみんな衝撃を受けていた。当然だ。

またあの無能なこの国の王は先の見えぬ戦争を始めようとしているのだ……

シオンは目を閉じた。

今分かった。

この国に平和などない。無能な王はこの国を病ますだけだ。

それなら俺が王になろう。

誰を殺しても、どんな犠牲を払おうと……

05（後書き）

次話くらいでやっとシオンがメインの話から抜け出せるかなと思っております。

早く主人公だしたいですし……

お気に入り登録や感想待ってます。

06（前書き）

今回は主人公がちゃんと出てきます。

まあライナやシオンは出てきませんが……

「正直に答える」

マントに身を包んだ男が剣を縄でぐるぐる巻きにされている男の首筋に突きつけ言った。

それに剣を突きつけられている男が喚く。

「お前何者だ！ 私を誰と心得る！」

「お前が誰かは知っている。この腐ったローランドの貴族のアヒム・ブロッサムだろ？」

冷たい目で睨めつける。

その貴族に剣を突きつけている男の名はグラナ・リュート。ライナの兄だ。

グラナはローランド領内のブロッサム家という貴族の館に居た。

「それより答える。ライナを、いやシオン・アスタールを襲うように言ったのはお前だな？」

「お、お前はシオン・アスタールの手の者か？」

「さあな。それよりお前が話せるのは俺が質問した答えだけだ。さあ答える。早く言わないと首と胴体が別れを告げる事になるぞ」

「ひいつ。ち、違う！ 私じゃない！ 助けてくれ」

ブロッサム家の当主は真っ青だった。

顔を蒼白にして命乞いをする。

「まあそれは知っている。本当の黒幕はザムル家の当主だ」

「な、なぜそれを……それより助けてくれ！ もうすぐアスタールは死ぬんだ。だから私を殺しても……」

「何だと？ どういう事だ？」

そう言い剣を下ろす。

シオン・アスタールが死ぬ。

そんな事はどうでもいい。

それよりライナだ。シオンが死ぬという事は近くにいるライナにまで危険が及ぶ可能性がある。
この情報は効く必要がある。

「しまっ……私は知らない。ザムル様しか知らない」

「嘘だな……死ぬとか言っておいてその情報を知らないなんて事はないだろう？」

「分かった。話す、話すから命だけは……」

「お前の答え次第だ」

そう言い剣をもう一度突きつける。

するとブロッサムは脅えた顔になりペラペラと喋り始めた。

「アスタール達、ローランド帝国王立軍事特殊施設の奴らが向かったロクサヌ平原がどうなってるか知ってるか？ 私たちが流した情

報でエスタブールの魔法騎士団五十人居るんだ。魔法騎士団と言えば化物の集団だ。そこに行って生きて帰れるわけがないだろう？それから……」

そこでグラナは貴族を蹴って話を途切れさせる。

なぜならもう聞く必要がなかったからだ。

エスタブールのスパイがローランドに居た。

そしてそのスパイをどうやったのか操り、ローランド王の息子の皇子の誰かがシオン・アスタールを確実に殺すために魔法騎士五十人をロクサヌ平原に集めるための情報を流した。

シオン・アスタールは自分で戦闘が少なそうなロクサヌ平原を選んだつもりがそこを罠にかけられたという事だ。

しくじった……

ライナがそんな危ない所に行くなら隠れて付いて行つたのに……俺自身もロクサヌ平原は安全だと思つて付いて行かなかった……今から行って間に合うか？ いや間に合わないといけない。そこでブロッサムに聞く。

「もう言う事はないか？」

「ひとつだけ聞きたい。俺も情報を与えたのだからこれぐらい貰つて当然だろ？」

「状況が分かっているのか？ まあいい何だ？」

「なぜ私の所に来たのかということだ……黒幕がザムル様と知っていた。黒幕の方がよく知っているのは分かっているのに協力者に過ぎない私の所に来たのかという事だ」

「あつちに行つても良かったが面倒な事は避けたかったのですね」

「面倒？」

「お前が知っていいのはここまでという訳だ。死ね」

グラナの持つ剣が動いたと思った次の瞬間、ブロッサムの体はバラバラになり死んだ。

たくさん血で床が満たされていく。

グラナは死体に背を向けた。

ザムル家に行かなかった理由。

それはエリス家の少女たちが周りを探っていたからだ。

だからわざわざ苦労して協力者まで割り出しここに来た。

いやエリス家の少女二人ぐらい簡単に殺せる。

しかしルシルは妹を…特にフェリスを大切にしている。

俺の目的はライナを守る事だ。

だからあの『すべての式を編む者』のルシルと戦う時ではなかった。

「とりあえず急がないと……」

屋敷を出てグラナは走った。

もうライナ達は出発している。

「俺はライナを守ると誓ったんだ。ライナだけは必ず……」

グラナは走る。

弟を救うために………

06（後書き）

すみません。みなさんオリ展開が無さすぎで怒ってらっしゃいますよね……

もうすぐ、もうすぐでちゃんとできると思います。

07（前書き）

こんばんは。

7話です。結構いい感じで書けたと思います。
ではよろしくです。

空中にあがる閃光。

グラナは少し離れた所でその光景を見る。

しかしすぐ後、焦ったような顔になり走るスピードが一層あがる。

「始まったのか……ライナ……俺が行くまで無事でいてくれよ……」

閃光が上がった方向へ一直線に走り抜ける。

木などの障害物は切り捨て道を開ける。

そんな事してもスピードは落ちることなく走る。

たった一人の弟を救うために………

？

『シオンさん。行つてきます！』

シオンにそう言い二つのグループが水汲みに、もう二つのグループが食糧探索に向かった。

ここロクサヌ平原にはシオンの仲間で構成されたメンバーが百二十人いる。今、二十四人が離れたから九十六人がここに集まっている。

テント張りとかをする九十六人をシオンは見渡した。

そして近くにいるその中でも信頼できるメンバーに声をかけた。

「タイル、トニー、ファル。君たちはさっき水汲みに行った班のテント張りをしてきてくれないか？ 僕も行くから」

「ああ。分かった」

そしてすぐさまシオンも席を立つ。

理由はキファとライナを二人つきりにするためだ。

キファは元気がない。しかし自分には何もできない。こういう時はライナの方がうまくできるだろう。

そしてタイルたちの後を追った。

「はめられた……」

ライナはそう言いキファを見る。

なにやら元気がない。

しかし原因が分からない。

多分この戦争の事だとは思うがここはシオンが選んだ安全な地域のはず。キファはなぜ暗いのだろう。

「ああゝもう寝よう」

考えるのをあきらめ横になった。

するとキファが話しかけてくる。

「ねえライナ。昨日も言っただけと私と一緒に逃げてくれない？」

キファは昨夜からこの調子だ。

ここは安全だとシオンが言ったのに……

「私…ライナが好き。ほんとには好きになっちゃいけないのに、友達も作っちゃいけないのにライナを好きになっちゃった。ライナには死んでほしくない。私と行こ？」

そこでライナは顔をしかめる。

好きと言われた。それもはつきりと……

しかし俺は…俺は…『アルファ・ステイグマ複写眼』。

忌み嫌われるこの目を持っている。

だからどうしたらいいのか分からない。

どうしたらいいのか分からずこつ言った。

「どうしたんだよキファ。冗談ばっか言ってつと……」

するとキファが離れた。

「そつだよね……分かってたのに……さようならライナ」

そう言つとキファは空中に魔方陣を描き始めた。

そして目を閉じて言った。

「我・契約文を捧げ・大気に眠る光の精獣を宿す」

瞬間、キファの目の前の空間に大きな光の球が生まれた。

それは魔法。しかしライナ達の国のローランドの魔法ではない。

魔法というのは各国でまったく形式が違う。

起動方法、構成、術式が異なる。だから自国以外の魔法を使う事は普通はできない。

だがキファは……

そこでキファの目の前にできた光の球は空へと上って行き弾けた。

「き、キファ。何を……」

キファは悲しげな顔でこつちを見て去って行った。
するとシオンが後ろから走ってくる。

「ライナ。今は……」

シオンはそこまでしかいう事ができなかった。

ライナも驚愕の出来事に目を見開いた。

ライナの目の前に人の上半身が投げ出されたのだ。
すぐ後に悲鳴が上がる。

異様な光景がライナ達の目の前に広がっていた。

死神のような巨大な鎌を持った、赤い甲冑に身を包んだ人間が真紅の残像を残しながら目にも留まらぬ速さで平原を駆け回っている。

そのたびに仲間の首や胴が飛ぶ。

まるで地獄のような光景だった。

そしてシオンが叫ぶ。

「え、エスタブルの魔法騎士団！？　なぜ……そんなことよりみんな森へ逃げろ。態勢を整えるんだ」

その言葉にたくさんの人間が森へと逃げる。

ライナ達も森の中へと走って行った。

森の中。

ライナ達は木陰で息をひそめていた。

「キファが……」

ライナの言葉もここまでだった。
もう間違いなかった。

キファはエスタブルのスパイ。
あの魔法はエスタブルの物。しかもあれは今考えると合図のようにも見えた。

「そうだな……それより敵が何人居たか分かるか？」

「五十人だ」

「すごいな。あの状況で数が数えれたのか」

「いや。魔法騎士の一人が言ってたからな」

「なるほど。それよりみんなは……」

そこでシオンは暗い顔になる。

その様子を見てライナも暗くなった。

そう二人共分かったいた。

全員は逃げれていない。少なくとも何人も死んでいる。

運よく逃げれたとしても相手は魔法騎士団だ。すぐに見つかり……
殺される。

「なあライナ……」

「はいはい。助けに行くつて言いたいんだろ？　けどお前死ぬかも
しれないぞ？　それでも……」

「ああ。俺の仲間だから……それにこんなところで死ぬようなら……」

「分かった。俺も付き合うよ」

そう言い二人共立ち上がる。

その顔はなぜか暗くない。その顔には絶対に仲間を助け生き延びるという覚悟が見える。

だがそこで……赤き死神の声が響いた……

「ひやははゝ見つけたあゝ」

エスタプールの魔法騎士三人がそこに立っていた。

魔法騎士団は一部隊で戦局を覆す実力を持った部隊。

その騎士団のメンバーが三人もライナ達の目の前に立っていた。

「ひやはは。逃げなよゝ早く。おもしろいようにしてくれよゝ。まあ無理だと思っけど……」

そこで魔法騎士の一人が魔法を唱える。

もちろんエスタプールの魔法。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

途端、そいつの全身がきらめいた。

そして消えたと思った瞬間。魔法を唱えようとしていたシオンの頭に掌を叩きつけた。

シオンはうめき声をあげる。

すぐに魔法騎士はシオンの頭を掴み離さない。

だがそこでライナが信じられない速さで魔法を唱えた。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

ライナの体もきらめき、加速する。

そしてすぐにシオンの所に行きシオンの頭を掴んでいる男を蹴り飛ばした。

「な——！？」

驚いたような顔で魔法騎士は吹っ飛び気絶した。
他の二人の魔法騎士も驚きを隠せない。

「ら、ライナ……今のは……？」

「お前は知ってるだろ？ 使いたくないし兄さんにもできるだけ使えなと言われたのに……」

そこでライナは二人の魔法騎士を見る。

その眼には……真紅の五方星が浮かんでいる。

アルファ・ステイグマ
「複写眼……ひいつ。あの災厄を起こしたあの……」

魔法騎士が悲鳴を上げすぐに魔法を唱え始める。

ライナはその特別な眼でその魔法の構成、形式、性質、威力などすべてを見抜き複写する。

魔法の完成は複写しているライナの方が若干遅かった。だが発動はライナが先。

「我・契約文を捧げ。天空を踊る光の魔獣を放つ」

ライナの前に光でできた不定形の犬のような獣が現れる。
そしてそれが魔法騎士二人に襲いかかった。
するとその二人は気絶しあっさり戦闘が終わった。

「ライナ！ お前寝ぼけたふりするのもいい加減にしろ！ お前の
力を使えば……」

「無理だつて。五十人も無理だ。それに実質倒したのは二人だしそ
れにこの眼を見て油断したから……」

そこでシオンは頭を押さえた。

「すまん。気が動転した……」

そして二人が仲間を助けに行こうと元きた道に戻ろうとした時……

「これはお前らがやったのか？」

顔をあげると魔法騎士が一人立っていた。
さっきの魔法騎士たちとは違う甲冑に身を包み、雰囲気も落ち着
いている。

おそらく隊長か何かだろう……

その後起こったことは至極単純な事だった。
強行突破しようとしたが周りにいた魔法騎士数十人に取り押さえ
られてしまったのだ。

それに……それに後で報告に来た魔法騎士が言っていて分かった
のだがシオン達の仲間は全滅。
残っているのはライナとシオン……

だがすぐ後に隊長と呼ばれた男がキファを連れてきた。

しかしキファも羽交い絞めにされ裏切り者扱いされていた。

そして今シオンは取り押さえられている。

ライナは隊長に頭を掴まれている。その隊長はライナの『複写眼』アルファ・ステイグマを覗き込むように見ている。

「ははは。噂程大したもんじゃないな……どれ目玉をえぐりだしコレクションにしよう」

ライナは相変わらずぼけつとした目で男を見る。
そしてすぐに目を閉じた。

こんな奴に目をえぐり取られるのか……

この目を……

それでもいいや。

もうめんどくさい。すべてどうでもいい。

こんな目えぐり取ってもらうのなんてどうでもいい。

いつも忌み嫌われ、畏れられ……

ふとそこでライナの頭を一人の男がよぎった。

そこで苦笑いする。

誰にでも忌み嫌われていた訳でもないな……

兄さん……

たった一人の家族。いつも優しくて強い兄。憧れだった兄。

ライナはその兄に会いたいという気持ちから微かな消えそउनか細い声でその名前を呼ぶ。

「兄さん……」

「……ナァ！」

遠くから声が聞こえた。

男たちは気づいていないが確実に近づいてくる声がした。

「ライナァー!!」

黒のマントに身を包み、フードを被り顔を隠した男がライナの名前を叫びライナの目の前。

目の前と言うには離れすぎているが男が一人立っていた。

そして走って近づいてくる。

シオン、キファ、ライナを押えている奴以外の魔法騎士が戦闘態勢に入る。

押えている奴らも視線は男の方を向いていた。

「貴様らどけえ！」

男が走って近づいてきてその道を塞ぐように立っていた五人の魔法騎士が吹っ飛ばされる。

他の魔法騎士はその男の前に立たないようにだが囲むような態勢になった。

しかしそんな奴らを無視して男はこっちを向いている。

すると被っているフードが外れた。そしてその顔が見えた。

そいつはライナによく似た顔の金髪の男だった。

その顔、声からすぐに分かる。

ライナの兄。グラナ・リユート。

そこでライナが口を開く。

「に、兄さん……」

そうか細い声をあげた。

その目には涙が溜まり、そこから溢れた涙が頬を伝う。

「ライナ。助けに来た。遅れてごめんな」

そしてグラナの顔は怒りで歪み、威圧感のある目でライナの頭を掴む男を睨めつけて言う。

「てめエ。その薄汚い手をライナから離せや！」

「は、はいい！」

人質を離す理由なんてあるはずなのにその威圧感に負け魔法騎士団の隊長はライナから手を放した。

そしてグラナから距離を取るように離れる。

すぐにグラナはライナに駆け寄り抱きしめた。

「大丈夫かライナ……？」

ライナは兄の温もりを感じ涙が止まらなかった。

そして兄のグラナに安堵したような声で言う。

「うん……兄さん……」

07（後書き）

どうでしたでしょうか？

結構いい感じでライナの兄。本編主人公のグラナ・リユートを出せ
たと思うんですが……

お気に入り登録や感想、お待ちしております。

08（前書き）

どうもこんにちわ。

今回の話は色々詰め込みすぎた気がします……

どうぞ。

「ライナ。立てるか？」

「ああ……」

ライナはグラナに支えられて立ち上がる。

ライナは殴られたり所々傷はあるが元気そうだ。
その様子を見てグラナはホッと溜息を吐く。

ライナは俺と一緒になくても元気に楽しく過ごせていたんだな
あと実感できる。

これはあそこにいるキファちゃんやシオンくんのおかげでもある
だろう……

助けてやりたいが……ライナの命が優先だ。

グラナはそう決めてライナと肩を組むような体制になりライナを
支え、魔法騎士団に背を向けた。

「行くぞライナ」

「え？」

ライナはびっくりしたような顔になる。

おそらくライナはキファ達もグラナが助けてくれるだろうと思っ
ていたのだ。

「どうした？」

ライナの言いたいことを予想しながらそれでも聞く。

「兄さん、えつと……シオン達は……？」

「悪い見捨てさせてもらう。俺の守るべき優先順位はライナ、お前だ。俺は何を捨てても、この命を捨ててももお前の命を守る決意をした。なら魔法騎士団と戦ってお前の命を危険にさらすわけにはいけない」

「でも……シオンとキファは俺の大事な仲間なんだ」

その言葉を聞きグラナは少し黙る。そしてライナを見る。

どうする……？

このままではライナはここに残ると言いかねない……
気絶させるか？

それならライナの命だけは守ることができる。

そしてグラナは目を閉じて心の中でほくそ笑む。

違うな……

ライナが大切ならその命だけでなくライナの大切な物も守ってやらないといけないな……それが兄としての役目。

それにこれから先、ずっと俺がライナのそばにいる事ができない時があるかも知れない。

そういう時は友達という存在は必要だろう……

だがライナが自分の命を捨てても助けたいと思える存在か確かめさせてもらおうか……

「ライナ。あの二人はお前にとって本当に必要な存在か？ お前の

「複写眼の存在を知っていてもお前のことを大切にしてくれるか？」

「それは……分からない。けどシオンは前から知っていたけど俺に對する態度を変えなかった。キファは俺の世話とかまあ色々世話になった。だからその恩も返したいから俺は命を捨ててもあいつらを助けたい！」

グラナはいつもの寝ぼけた様なやる気のないような瞳ではない、決意のこもった眼を見て笑った。

そしてライナの頭に手を置いて言った。

「分かった。兄ちゃんがパパッと助けてやる。だからお前は俺から離れるな」

「ありがとう」

その言葉を聞くとグラナはライナを降ろし、剣を抜き、律儀にもずっと待っていてくれた魔法騎士団に向き直った。まあ待っていてくれたというより動けなかったただけだろうが……そういう風になるように殺気を向けていたし……

するとそこでやっと魔法騎士団の隊長が口を開いた。

「お、お前ら何無視してくれてんだ！ それになめやがって……こっちは人質が居るんだぞ！」

そう言いシオンとキファを見せてくる。
そしてナイフを突きつけた。

「どうだ……動けまい……。へへへ、まず武器を捨てろ」

人質を取ったことで優勢に立っていると勘違いしているのだろう。
グラナはニヤツと笑いながら隊長の姿を見る。

「どうした。早くしろ」

「分かったよ」

グラナはそう言い剣を空に向かって投げる。

それは弧を描いて隊長に少し掠り、地面に突き刺さった。

武器を捨てるとは言ったが本当に捨てると思わなかった奴らは驚いたような感じになっている。

その隙を逃さず、とんでもないスピードで隊長の目の前まで移動する。

そして手刀を作り、シオン達に向けているナイフ目がけて振り下ろした。

その行動に一瞬遅れて気づいた隊長と魔法騎士団。

グラナの行動をずっと見ていたライナ。

自分に突きつけられているナイフを見ていたシオンとキファ。

グラナを除くその場にいた全員が次の瞬間信じられないという顔をするようになる。

ナイフが手刀でバラバラにされたのだ。

「な——！？」

隊長は人質を捨て後ろに跳ねる。

そしてすぐに魔法騎士達が全員、一斉に魔法を唱える。

『我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す』

全員の体がきらめき動きが早くなる。

そして三人がグラナに向かって来る。そして後ろの魔法騎士が魔法を唱え始めた。

しかしグラナはそれよりも早く移動し、シオンとキファを掴み離れる。

「ライナ。走れ」

ライナは頷き走り始める。

グラナも二人を背負い走る。

しかし魔法騎士が唱える魔法が完成する。

「我・契約文を捧げ・宙を覆う精霊の力を放つ」

全員が同じ魔法を唱える。

魔法を唱えた瞬間、青い渦が空間に現れグラナに向かって放たれる。

「エスタブルの最強の魔法で塵になれ！」

「くそ……この量では俺でも……くそっ」

グラナはシオンとキファを降ろし、首で合図してライナの方へ行かせる。

グラナはライナ達に背を向ける。

「ライナは俺が……守る」

そう言い魔法に向かって走り始める。

ライナはその様子を離れた所から見ていた。そして叫ぶ。

「兄さん！ こっちに帰って！」

しかしその声は届かない。

そしてライナの心は兄のグラナが死ぬかもしれないという恐怖に覆いつくされていった。

そのライナの感覚は冴えわたり世にある存在すべての構成が視界に広がる。

数値で、グラフで、模様で。

その時、ライナの心の中に声が響く。

人が死ぬ。

しかしすべてがどうでもいい。

さあ終わらせよう。

すべてを。

望むままに。

開放する。

開け。

殺せ。

全てだ。

目に見えるものがすべて消えるまで……

「あ、あああ」

意識していないのに声が漏れ出ていた。

だけどそれがどうした？

久しぶりに会えた兄が、自分を守ってくれた兄が、大切なたった一人の家族が危ない、この事実以外どうでもいい。

兄を助けないと……

すべての物を消してでも……

人が死のうが生きようが……兄さんを守るならどうでもいい。

[illegible]

ライナは笑っていた。狂ったように……

その眼には真紅の五方星が増殖を繰り返している。

ライナは手を掲げる。すると目から零れ落ちた五方星が手の平に張り付く。

そしてどこからか声が堕ちてくる。

存在を解析・解除

瞬間、グラナが必死になって避けたり斬ったりしていた魔法がすべて消える。

グラナはライナの方を見て呟く。

アルファ・ステイグマ
「複写眼の暴走……またか……」

グラナのそんな様子を無視し、ライナは話す。威圧感のあるどこからか堕ちてくる声で。

[illegible]

そしてライナの目から零れ落ちた五方星が一人の男の胸に張り付いた。

「なんだあ？」

『逆らうな。お前の分子は砂になって消える』

瞬間。ひゅんと言う音と共に砂になる。

圧倒的な力の差があった。

魔法を唱えても消され、人間でさえ消える。

その様子に魔法騎士達は絶句する。

『α（はじまり）は破壊だ。我はなにも生み出さない。恵まない。救わない。ただ消すだけ。真っ白に』

ライナが動き出した。

近くにいる男に手の平の五方星を押し付け言う。

『砕ける』

砕ける……

『壊れろ、消えろ。弾ける。はははははは』

壊れ、消え、弾ける。

物質はその言葉に従うようになんの抵抗も見せずに言葉の通りになっってしまう。

そんな感じでほとんどの魔法騎士が殺された。

そしてシオン、キファを見る。

『なんだ……？ 力が抜ける。五方が消える……契約が……違う』

そしてシオンとキファの前まで来て、喉を捉えて持ち上げる。

『貴様らは危険だ……力が抜け……』

グラナはライナに近寄って行く。
横に來るとライナの肩に手を置く。

「ライナ……この二人は君の大切な仲間なんだろう？　ライナ聞こえてるか？　お前ならアルファの支配から抜けれるはずだ。帰っておいで」

そう優しい声で語りかける。

それからグラナは優しくライナのまぶたに手を掛ける。

「ライナ。目を閉じるぞ？」

『やめ……ろ……』

その時のライナの顔は笑っているように見えた。

グラナはそつとライナの目を閉じさせた。

そしてふつと力が抜けたように倒れこむ。

グラナはその体を支え優しく言う。

「ライナ。大丈夫か？」

ライナはボーっとした感じでグラナを見て頷いた。

そして仲間の安否を確かめるように視線を動かす。

そしてその眼は泣いているキファ。ある方向を向いているシオンを捉えた。

シオンの視線の先には大きな音を響かせ、近づいてくるローランド軍が居た。

「仲間を死なせたのは俺の過失だ。今俺が王じゃないのも……」

グラナはライナを労わるように優しい声で言う。

「ライナ。帰ろうか……」

ライナはそこでもう一度頷いた。

08（後書き）

感想待ってます。

09（前書き）

お久しぶりです。

今回からは少しの間だけ『堕ちた黒い勇者伝説』の方へ入って行きます。

堕ちた黒い勇者の伝説をまだ読んでない方でこれから買って読もうと考えてる方は注意してください。

ほとんど飛ばしていくと思いますがネタバレありますから。

風になびいた銀色の髪、その髪の持ち主、シオン・アスタールは金色の瞳で仲間の死体を見る。

その金色の瞳には、悲しみと後悔と絶望で淀んでいた。いつもなら強い光は見る影もない。

「くそ……」

何がこの戦争で僕たちは死なないだ。

俺は無力だ。仲間を二人残して他は殺してしまった。

俺は自信満々に言っていたのに……

——— な？ 俺について来て良かっただろ？

偉そうに言っていたのに俺は……俺は……仲間を殺した。

自分が作り上げた組織網ネットワークの中に裏切り者がいた。

それに気づかず、

「……このざまか」

そして生き残った仲間を見る。

一人は泣いていた。

キファ・ノールズ。

赤毛のショートカットに赤い瞳。

彼女を苦しめるのは心の傷。仲間は全員彼女の裏切りで死んだからだ。

俺の憶測だが彼女は二重スパイをやっていたのだろう。俺の王族きょうだいの誰かに弱みを握られたのだろう。

次にもう一人の仲間、ライナ・リユートを見る。

彼も泣きそうな黒い目で自分の足元を見ている。

そこには原形をとどめていないがエスタブルの魔法騎士団の死体が転がっていた。

やったのはライナ。

いや、ライナの中の何かだ。

そしてライナの黒い瞳を見る。

そこには五方星が浮かんでいる。

アルファ・ステイグマ
呪われた眼、『複写眼』だ。

その眼が暴走し、魔法騎士団を壊滅させた。神の様な力を見せてく
けて。

そして次にライナの頭の上に手を乗せ押し寄せてくるローランド
の大軍を見ている男を見る。

グラナ・リユート。

ライナの兄だ。彼もとんでもない力を持っている。

それは訓練されたものが見ればすぐに分かる。服の上からではよ
く分からないが細く、しなやかに鍛えられた体。

さっきの戦闘の時には魔法騎士団相手に余裕で勝って見せた。

その時にはとんでもない威圧感がそこを支配した。

剣の一族の一人のフェリス・エリスと言うとんでもない強さを持
った少女に出会ったことがあるがそれと同等かそれ以上の力を持っ
ているだろう。

そんな彼はシオンやキファの命の恩人と言えるだろう。実際助け
てもらったし。

だがそんな力を持っていても彼は力を使わない。

彼は一つの使命、目的で動いている。

弟、ライナ・リユートのためだけに動いている。

ライナがピンチだから助けに来て、ライナが頼んだからシオンと
キファを助けた。

ライナのためなら命さえ捨てる覚悟だろう。

彼はライナの仲間だ。しかし俺の仲間か……？

そしてシオンはローランドの大軍の方へ目を向ける。

あれは敵か、味方か……

俺を殺したい兄弟の軍か、それとも……

しかし俺は生き残らなければならない。

ここで死んだ仲間のためにも。

もう二度と約束を違えてなるものか。

僕について来たら君を守ってあげる。

僕についてきたなら新しい世界を見せてあげると。

一つはもう破ってしまった。

だが二つとも破るわけにはいかない。

そこで彼の金色の瞳に強い光が戻った。

そして姿勢を直し大軍を見る。

「俺は前に進んでやる！」

09（後書き）

次の話はほとんどできているので今日中に更新します。

次は戦闘あります。

原作とは違いますが。

まあうまく書けている自信はないのでちょっと見直してから更新しますので三時は過ぎると思います。

10 (前書き)

う……ん……

ちゃんと書けたかな……？

一匹の馬が走る。

「斥候か？」

シオンはそう声を上げるがすぐに疑問が浮かんだ。
なぜならここは一人で来られる場所ではないのだから。

エスタブルの魔法騎士団がいるという情報は伝わっているはずで、なのに一人でこっちに向かってきているのだ。

そしてすぐに騎兵が来る。

そして騎兵が普通の馬とは違う巨大な馬に乗っていることに気づく。

「なんだあ？」

その騎兵が言った。

そいつは燃えるような真っ赤な髪に、鋭すぎる赤い瞳。鋼のように鍛えられた肉体。

まるで全身がさっきの塊のような男。

だがそれにシオンは気圧されたりしなかった。もう慣れてしまった。

それもさっきまでの数時間で。ライナの眼が暴走した時の威圧感はいいつの比じゃないだろう。

しかしそこで疑問が浮かぶ。

こいつは使い捨ての斥候とは思えないからだ。

むしろ一人で魔法騎士団を壊滅させに来たかのような余裕さえ見せている。

そいつに向かってシオンは言う。

「軍は援軍をよこしてくれたのですか？」

そう聞くと赤い髪の男は品定めするようにこちらを見たまま無言だった。

そしてすぐに視線を外しキファを見る。キファは少しビクツとしたがすぐに俯いた。

次にライナ。ライナは気にした様子はなく無言のままだ。

そして最後にグラナ。

グラナを見た瞬間、赤髪は眉をピクツとつり上げたがすぐにシオンに話しかける。

「なにがあった？」

「えっと……」

話そうとしたシオンを遮り、こう言った。

「やっぱいいわ。どっちにしろ計画は狂った。おまえ名前は？」

「シオン・アスタールです」

「ああ。おまえがあので、この指揮官はお前だったと……」

「はい」

そしてシオンを見下すような目で見て言った。

「仲間は死んだのに、指揮官のお前は生き残ったと……」

そこでシオンは顔を歪ませる。
しかしそこで後ろから声がした。

「こいつらみたいに使い捨てにされる駒の力はそんなもんだろう。
罫にはめられこいつらを確実に殺せるだけの敵がここにいたのだからほとんどの奴は死んであたりまえじゃないのか？　紅指のクラウ・クロム？」

そこで赤髪は馬から飛び降りた。
地面に足が付いた瞬間、とんでもない殺気が吹き出した。
そして体を低くし、戦闘態勢に入ってから言った。

「お前、何者だ？　ローランド王立なんちゃらの生徒じゃないだろう。そんな奴リストにはいなかった」

「そうだけどなにか？」

「答える。名前は？　所属は？」

「名前はグラナ。所属は……なし」

「なしだあ？　本当のことを言え！　殺すぞ？」

そこでクラウは動く。

命の危険にさらして吐かせようという感じだろう。
クラウが一步、二歩、三歩進むとすぐに間合いはゼロになった。
グラナはそこでとんでもない量の殺気を噴き出した。
そしてクラウが驚いたすきに後ろに下がる。

「本格的に何者だ、お前」

今、グラナはエスタブルの魔法騎士団と戦っていた時以上の殺気を吹き出している。

それに威圧感も増していた。

シオンは少し離れた所にいるのに気圧されていた。

「別に何者でもないけど？」

そう言い終わった時にはクラウの真ん前まで移動していた。

「な———！？」

驚いたクラウの胸の所にグラナは数発殴る。

するとクラウは吹っ飛んだ。しかし空中で態勢を整えると地面に綺麗に着地した。

「まあお前ごとкиでは勝てない存在だな」

グラナはそう静かに言う。

殺気は嘘のように消えていた。

クラウは口から出た血をふき取りながらこう言う。

「強いな……しかし解せない。こんな奴がいたら魔法騎士団なんて余裕で倒せるだろう？」

「俺は戦う気はなかった。守りたいものを……」

グラナはそこで言葉を止める。

軍からもう一人男が近づいてきたからだ。

男は見ただけで分かる。指揮官だ。

男には規律と秩序が感じられた。
その後ろには軍が一系乱れぬようすで後ろを走っている。
こいつが全体を統制しているのが分かった。
途中で軍を待機させ十人の騎兵を連れて向かってきた。
そして男がクラウの横に立った。
十人の騎兵を後ろに待機させて。

「クラウ。どうした？ 戦っていたようだが？」

シオンはそこで気を引き締めた。
この男にはクラウとは違う異常さを感じたからだ。

「ああ。そのことですが凄いいレギュラーがいましたよ。俺でさえ勝てませんねこいつには」

クラウが親指でグラナを指した。
すると男が驚いたように顔になり呟いた。

「なっ！？ 貴様、リユーラ・リユートルーか！？」

そこでグラナの眼が吊り上る。
そして男の前に一瞬で移動する。

「ラッヘル・ミラー。黙ろつか。俺はリユーラじゃない。グラナだ」

「そうか。貴様は奴の……はははは。納得だ。クラウが勝てない奴なんてそうそくないが奴の……」

「黙れ！ その後はライナの前で言っな」

最後の部分はミラーの耳元で囁いた。

「まあいい。黒髪の男と赤毛の女を手当てしてやれ」

グラナはその様子を横目で見る。

「大丈夫だよ。今は君たちに危害を加える気はない」

そこでシオンが口を開いた。

「私は……」

しかしそれは遮られる。

「言うな。分かっている。汚らしい犬の息子だろう？」

その瞬間シオンは自分の置かれている状況を理解した。

こいつは敵なのだ。

しかし生き残る必要がある。

ここで死んだ仲間の命を無駄にせぬためにも生き残る必要があった。

どうやって生き残る？

敵が目の前を奴を含め八人居た。

四人がライナとキファを連れて行ったから目の前の奴ミラーとクラウ、そして六人の騎兵がこの場に残っていた。

二対八。だがグラナが居れば勝てるかも知れない。

そう思った。だがグラナが味方してくれる自信はない。

彼はライナの為だけに戦っているのだから。

そこで脳内シュミレートする。

逃げる方法を探して。だがなかった。

目の前にはすべてを見透かすような目をした男が居る。
魔法騎士団を一人で倒しに来たやつがいる。
そんな中でシオンは薄く笑みを浮かべた。

10（後書き）

感想頂けると嬉しいです。

少し納得がいったような気がするので後で少し変更があるかも知れません。

11（前書き）

最初の方はシオンとミラーばかりです。

最後の方はグラナもちゃんとでてきますけどね。

今回は僕にしては長めの5000文字近く行きました。

シオンは絶望的な状況の中で笑みを浮かべた。

なぜなら……この絶望的な状況でも生き残る事ができたなら本当に世界を変える事ができるかもしれないと思ったからだ。

それに生き残って世界を変えなければ仲間にも申し訳が立たないからだ。

そこでミラーに問う。

「お前は貴族の、俺の兄たちの手下だろう？ 俺を殺すのか」

そこでミラーは顔色一つ崩さず淡々と答える。

「ただのクズが偉そうだな……俺について来れば安心？ そして集めた仲間はどうなった？ 全員死んだ。お前が殺した。なのに元気だな。クズが」

シオンはそこでまた何も言えなくなった。

だが必死に気を振り絞り言う。

「だからだ。ここに連れてきた仲間には申し訳なかったが、俺はこんなことを繰り返さないために力を付けてやる！」

そこでミラーは、少し笑みを浮かべてシオンを見た。

「ほう。中々おもしろい。お前には利用価値があるかもしれんな、ここに来たときは仲間にするほど価値はないと思ったが……」

そこでシオンはえ？ という表情になる。

こいつが貴族の手下なら仲間を集める必要はない。
だがこいつは言った。それはなにを意味する？
革命でしようかと企んでいるのではないか？

その考えがシオンの頭の中をめぐる。
そしてミラーを見る。

こいつはローランドの中でも強大な権力を持っているようだ。
それもこの腐ったローランドを変えるために動いている。
それにあの赤髪の化物。背後の数千の兵。
そのすべてがこの男に屈服し付き従っているように見える。
だがこんな勢力シオンは知らなかった。

こんな反王制の勢力があるならシオンの方からとづくに接触して
いるはずなのだ。

シオンの情報網は軍の奥深くまで食い込んでいたはずなのにこの
男の存在を知らなかった。

いや知ってはいたがよくない噂ばかり耳にしていた。
貴族に媚へつらい、女を斡旋して権力を手に入れた男。
階級は大尉。かつて天才の名を欲しいままにしてきた男。

誇りを失った堕ちた天才。そうシオンは呼んでいた。

だがその話を思い出し、シオンは参ったなあと思う。

世界を変えるために必要ならばどんな汚いことでも平然とやって
来た男に勝てる気がしなかったからだ。

そしてシオンはこう口を開いた。

「じゃあどうするんだ？ 俺を仲間にして革命をするか、俺を仲間
にせず革命をするのかどっちなんだ？」

「それは今考えている」

「答えは出ているんでしょう?」

そこでミラーは無言になる。

何かを考えるように遠くを見る。

その無言の後、ミラーはこう言った。

「君を初め私は仲間にする気はなかった。君を嫌っている勢力と戦うのは避けなければならなかった。あくまで私は貴族の犬で権力に溺れた男でなければならなかった。だから君はここで……」

「死ぬはずだった?」

ミラーは頷く。

そこでシオンはちよつと待て、と声をあげた。

「ならこの計画を立てたのはお前?」

「そうだ。キファ・ノールズを利用し、シュリオ皇子にこう言った。『シオン・アスタールとエスタブルの魔法騎士団を一気に罠に陥れる事ができる』とね」

シオンは黙ってそれを聞いていた。

そしてミラーは続ける。

「まあキファ・ノールズは姉を殺され妹を人質に取られいいようにされていたからな。問題あるか?」

なんてことを平然と言った。
それにシオンは、

「その理論に問題はない」

そう言った。

そう、こいつは完璧なまでに正しいのだ。

シュリオ皇子というあまり地位の-highくない皇子に取り入りエスタブルの魔法騎士団を壊滅させた手柄での上がったシュリオ皇子を影から操り世界を変える。

だがシオンはこう言う。

「正しいな……だがお前のやり方は好きではないな」

「私もだ。だが代案があるのかね？」

それにシオンは答えない。

力も知恵もないガキが叫んだところで意味はないから。
だがその代わりにシオンは問う。

「キファの妹は……？」

それに今度はミラーが答えない。

だがそれでもう分かった。キファの妹は死んでいるのだ。

キファは妹を人質に取られ祖国を売り、仲間を裏切ったのだ。

もう死んでいる妹を救うために。

それはもう哀れでシオンはそれでも笑いそうになる。

そんな話、この国ではよくある話だったから。

だからこの国は変えなければならない。

そう思い、シオンは言う。

「まあ御託はいい。教えて欲しいんだけどあなたの描く地図の中に

僕が生きる場所はあるのか？」

「少しはなくてもいい……」

そう言いミラーは後ろを振り向いた。
馬が一騎離れてくるのが見えたから。
そしてミラーはこう呟く。

「シュリオ皇子がまた暴れだしたかな」

そしてこっちにやってくる兵士を見続ける。
どうやらあの軍はシュリオ皇子の名のもとに集まっている軍のよう
うだ。

ミラーの息がかかった。だがシュリオ皇子の名のもとに集まった
兵士。

誰もがあれを反王制の勢力だとは思わない。
旗頭は王族なのだから。

そこでシオンはミラーに問う。

「あそこの兵は全部……」

「全部私の仲間だ。シュリオ皇子を除く……」

なら、そうシオンは呟く。

ならまだ生き残れる可能性がある。
シオンを使えばミラーが考えるよりずっと早いスピードで革命が
終わる方法があるのだ。

妾腹の息子であるシオンがエスタブルの魔法騎士団を壊滅させ
たということを国民に言う。

すると貴族を除く大半の勢力を味方に付けられる可能性がある、

大きな功績だった。

さらにシオンが貴族に虐げられていたということがプラスに働くだろう。

反貴族の勢力を味方に付けられるかもしれない。

おまけにシオンが一応王の血を引いているということがローランドの利権に食い込めていない貴族を取り込むのにも役立つからだ。だがこれは賭けだった。

もしかしたら戦争になるかもしれない。ミラーの勢力対、貴族の勢力。

その時、離れてきた兵が到着し、ミラーに話しかけた。

「ミラーさん。どうします？ 早く終わらせて宴会にしようとか言ってくるんですが」

だがミラーは何も言わない。

どちらがより犠牲を少なくして進める道か。

そこでシオンは言う。

「俺を選んでくれたら後悔はさせない」

その自信があった。

もう二度と間違えたりしない。

もう二度と自分の力に溺れて仲間を無駄死にさせたりしない。だからもう一度……

「もう一度チャンスをくれ」

シオンは続ける。

「この国を変えるチャンスを……俺にくれ！」

そしてミラーはナイフを取り出し投げる。
それはさっき来た男に向かってだ。

「じゃあこれが答えですか？」

伝令の男は嬉しそうな、楽しげな顔のまま言った。

「そうだ。もうあいつは用済みだ」

「はあゝい」

そう言い馬を走らせる。

殺すのだ。皇子を。それをしてもいいだけの力をミラーは持っているという事になる。

その考えを読んだのかミラーはこう言う。

「まだそんな力を持つてはいない。これは賭けだ。まあお前の方が言う事を聞きそうだったからな。お前は与えられた役を演じればいい」

そしてミラーは後ろに控えていた部下に命ずる。

「エス、トゥーリオ。この皇子様を首都へ連れて帰れ。
ゲル。カルネに伝えて情報操作の準備をさせろ。嘘を交えて話を大きくして広めるんだ。

パーネル。部隊を解体する準備だ。シュリオが死んだらあの舞台は散り散りになる。うまいこと敵対勢力の中に俺達が入り込むようにいじれ。

いいか？ ここからは休む時間などないぞ。革命を始める。刃向

「う者は皆殺しだ！」

それに部下は、はいと大きな声で返事をした。

その声には歓喜の色が混じっている。待望の革命が始めると。

誰もシオンを見てはいない。この革命はラッヘル・ミラーという一人の天才によって成されるのだ。

シオンは傀儡。言われた通りにすればいい操り人形だ。

それにシオンは思う。

そんなことはどうでもいい。

世界を変える。そのために自分も力を付けてやる。

もうやることは決まっている。

シオンの眼には光が宿っていた。

誰もが惹きつけられる強い光が。

そしてシオンはミラーの部下の言われるがまま馬に乗りローランドの首都レイルードへと向かう。

途中振り返り後ろでなにやらミラーと話しているグラナに目を向ける。

そして小さな声で呟いた。

「ありがとう……そしてなんとしてでもお前の力、俺が貰う」

そして馬に乗り走り続けた。

？
？
？
？

「で、何の用だ？ ラッヘル・ミラー大尉？」

グラナは低い声音で脅すように言った。

ミラーは静かにグラナの姿を見ている。

「なんともそっくりだな。リユーラ・リュートルーに」

「息子だからな」

そこでミラーは頷き、グラナに言う。

「なぜあのライナという複写眼の持ち手のお前の弟の前で私がリユーラ・リュートルーの事を言うのをやめさせた？」

グラナは少し考えるようにして言った。

「お前に教えてやる義理はない」

「ふっ……まあいい」

そこでミラーは一呼吸置きグラナに提案をした。

「私の部下になる気はないか？」

グラナはミラーをバカにしたような笑いを漏らし言った。

「お前の部下になる気はない。誰の部下になる気もな……」

「じゃあ言い方を変えよう。私の部下になれさもないと大事な弟、ライナ・リュートを殺すぞ」

口調に殺気を混ぜて後ろの軍を指差し言った。
そこにはライナが手当てを行われている場所だ。

そこでグラナはミラーに言った。

「なぜ俺を部下にしたい？」

「簡単なことだ。お前は優秀そうだからな。なにより強い。そのクラウより強い奴を仲間にしたくない奴なんていないと思うが？
少なくともシオン・アスタールはそう思っただろうな」

「俺の力は誰かに仕えるために存在していない。それにお前脅そうとしても無駄だぞ？ お前やその赤髪が後ろの軍の誰かにライナを殺せと命じる前に俺はお前ら二人を殺してライナを連れて逃げる事ができるからな」

そこでグラナは本気だぞ。ということを見せつけるために殺気を抑える事もせずすべてミラーにぶつけた。
するとミラーは少したじろぎ言った。

「そのようだな……ではいい。その代わり私達をここで殺さないでほしいな。まだやらないといけないことがあるのでね」

「分かった。だがライナに手を出すな。ライナをやればお前やお前の妻や仲間をすべて殺してやる。いや殺すよりも辛い苦痛を味わわせて最後に殺してやる」

そこでミラーは頷き、クラウに馬をやれと命じた。
するとクラウはすごい勢いで後ろの軍に戻り馬を一頭つれて戻ってきた。

「ほらよ」

そう言いクラウは馬をグラナに渡した。

グラナは素直に受け取り馬にまたがった。

そしてミラーの方を見て言った。

「さっきの言葉忘れるなよ。それと一つ忠告しておいてやる。お前らの革命はこのままでは失敗する」

「なんだと？」

ミラーは眉を吊り上げ言ってくる。

グラナは少し笑い言った。

「このローランドと言う国はお前の知らない歯車で動いている。それをお前は知らない。だからこの革命は失敗する。このままではなお前はその歯車に合わせて筋書きを変える事だ。早くそれを知った方がいいぞ？ ローランドの闇を」

そう言い馬を走らせる。

ローランドの首都、レイルードに向かって。

その後ろ姿を見てクラウ・クロムはミラーにこう言った。

「ミラー先輩。あいつ何が言いたかったんでしょうね？」

「さあな。しかしローランドの闇と言う言葉は昔言われたことがある。本当にこの世界は違う歯車で回っているのか？」

しかしミラーは不安を抱いても歩みを止めない。
止めたならすべてが終わるからだ。

だからミラーはその歩みを止めずに言った。

「クラウド。私は進むぞ。お前はどつする?」

「あんたの部下になった時から一緒に進むことは決まっていますよ」

「なら早く合流して革命を始めろ!」

そこにはかつて天才と呼ばれた男の強い揺るぎのない決意があった。

11（後書き）

どうでしたでしょうか。

ここからはオリジナル展開をめっちゃ盛り込みたいと考えています
がさてさてどうなる事やら……

感想待ってます。

12（前書き）

大伝説の勇者の伝説10巻買えてません（涙

とある部屋の一室。

そこには二人の男が居た。

一人は昼寝をしていて、もう一人は隣で寝ている男を優しそうな目で見つめていた。

すると突然、起きている男、グラナ・リュートは寝ている弟から目を離し、ドアの方へ目を向ける。

そして少し警戒する。

それに気づき、ライナも目を覚ました。

「どうしたの、兄さん」

それに答えず、グラナは静かにドアの方を向いていた。するとコンコンとドアをノックしている音が聞こえた。

「誰だ」

静かに問う。

敵なら殺すぞと言う殺気を含めた口調で。

まあグラナには誰かはだいたい予想はついたが、ライナを守ると決めた日以来、警戒を怠るようなマネはしない。

「シオンです。入っても？」

そこでグラナは警戒を少し緩める。

そして、『入れ』と言い人を招き入れた。

そこにはあの日以来、軍部で出世した男、シオン・アスタールが居た。

銀の髪に強い意志が秘められた金の瞳を持つ、一人の青年を中に招き入れた。

シオンは中に入るなり、起きてベッドに座っているライナに話しかけた。

「ライナ、逃げる。軍の上層部の連中はお前を監獄に入れる事を決めた。もうすぐにでも来るぞ」

「なんで？」

「なんでって……この間の一件で『複製眼』アルファ・ステイグマを野放しにするのは危険だっと思われたんだよ。あ、そうそう上層部にはお前がエスタブールの魔法騎士団を壊滅させたってばれてるよ」

ライナの表情からシオンは補足した。

「じゃあなんでお前が出世してんだ？ エスタブールの魔法騎士団を壊滅させてエスタブールを降伏まで追い込んだのはお前って事になってるんだろ？」

「それは俺が名乗り出たからそうなっただけ。軍部は民衆の支持は得たい。だから英雄を出世させる」

そこでライナは納得したように頷き、その後あくびをしてベッドに寝た。

「俺逃げないわ。めんどくさそうだし……そうそう、キファはどうなってる？」

シオンの表情はそこで少し陰る。

そして言いにくそうに口を開き言う。

「キファは投獄されている。彼女はスパイ。姉と妹と一緒に送り込まれ、ローランドにバレ姉を殺され妹を人質に取られた。それでローランドに良いようにされてたんだ。妹はとつくに死んでる」

「ふん」

そこで完全に黙秘を決め込んでいたグラナはライナの表情から何がしたいのか悟り、声をかけた。

「ライナ、うまくやれよ」

「ありゃ、ばれてた？」

「当たり前だ。俺はお前の兄だぞ」

すると突然扉が開き、男が二人、入ってきた。

ライナは立ち上がり、シオンとグラナにピラピラ手を振りおとなしく連れて行かれた。

ライナがいなくなり、グラナとシオンが取り残された。

シオンはグラナの言った意味が分からなくて問う。

「ライナはなにをするつもりなんだ？ それにお前はライナを守るのが使命なんだろう？ 助けなくていいのか？」

グラナはライナが去って行ったドアの方を見たまま静かに言った。

「ライナは軍と交渉するつもりだろうな。おとなしくする代わりにキファを逃がせとな」

「ああ、そういう事か」

シオンは納得したように頷く。

そこでグラナはシオンの方へ向き直り、口を開いた。

「あんなところすぐ助けられる。それにライナがやりたいと言っなら兄としてやらせてやるべきだろ」

「すごいブラコンだな」

「なんだって？」

そこでシオンは笑う。

それにつられてグラナも少し笑う。

少しの間笑い、続けた。

そこでシオンが笑うのをやめ、真剣な表情になる。
それを察してグラナも静かにシオンを見た。

「グラナ。俺に力を貸してくれないか」

「つまりお前の部下になれと？」

「違う。仲間だ。俺はお前の力が欲しい」

グラナは真っ直ぐな金の瞳を見て問う。

「俺が仲間になった時のメリットは？」

グラナはそんなものないと思いながらも聞いてみる。

なぜならグラナはただ単に弟を守りたいだけなのだ。そのための力は持っている。

そうグラナは思っていた。

『アスルード・ローランド堕ちた黒い勇者』が『ライナ寂しがり』つまり弟を喰らい、『エリス悪魔』つまりルシル・エリスを喰らい『真』になるのは父、リユーラ・リユートルーが阻止してくれるはずだ。

『真』になるにはライナが必要だ。ということはルシルはライナを殺そうとはしないはず。

現国王はライナを喰らう時には達してないから大丈夫のはず。女神も父がなんとかしてくれるだろう。

つまりはだ。グラナを脅かすような敵はいないことになる。

ライナを守るときにグラナは自分より弱い奴と戦う事になるのは決まっている。

女神は直接来るようなことしないだろうし、女神の御使い程度ではグラナを倒すことはできないだろう。

それが分かっているながらもグラナはシオンに問う。

シオンは人を引き付ける何かがあったからだ。

もしかしたら考えもつかなかったメリットがあるかも知れない、そう思ったからだ。

「お前はライナでしか動かない事は分かっている。だからいい話を持ってきた」

「それは……？」

「ミラーは革命を起こそうとしている。だがそれは失敗するだろう」

そこでグラナは驚いたような顔になる。

シオンが自分が考えてもないようなことを言ったからだ。

シオンはこちら側の事情を知らない。なのに失敗すると言ってきた

た。

ミラーの計画は一応調べさせてもらったが完璧だった。なんにも狂っていないければ確実に成功するだろうという案だった。

つまりシオンはこちら側の事情を知らない訳だからそう思うっていなかった。

「なぜそう思った？」

「なぜなら俺が邪魔してやるからだ」

そこでグラナは少し笑う。

自分は深く考えすぎた。このシオンは自分が邪魔をすればミラーが失敗すると思っている。

そんな訳ないのに。ミラーは必要なら仲間も殺すだろう。それにミラーの考えは相手のする最悪の行動を考え行動するらしい。ならシオンがするもっとも最悪の方法に対する打開策も練っているだろう。

「お前はバカだな。ミラーはそんな単純な男じゃない。お前が邪魔しても大丈夫のようにしているだろう。奴は人間としては優秀な人種だ」

『人間としては』の部分強調して言う。

そうミラーは人間としては優秀だろう。賢く強い。目的の為に汚いことだってする。

きれいごとでは世の中渡って行けないのを知っている。

父からもミラーの話は少し聞いていたし。

そこでシオンは口を開く。

「もちろん今は無理だ。戦力を十分そろえてだ。そこでお前の力が

居る。あの紅指のクラウ・クロムより強いお前が。それにミラーは気づいてないかもしれないがこの国はそんな単純なものではないと思う。エリス家だ。あそこは普通じゃない。当主のルシル・エリスにあったが人間とはとても思えないような奴だった」

「ほう」

考えすぎでもなかったようだ。

ルシルに会い、その力を目の当たりにした。

なら気づいてもしょうがなかっただろう。

そこでシオンは続ける。

「今からエリス家に行く。そこで俺はエリス家さえも仲間にしてやる。だからお前も来い」

「だからメリットは？」

話がそれすぎていた。

だからグラナはもう一度言った。

「まあこれは前置きだったわけだが、俺は王になる。そしてすべてを変えてやる。そうしたら俺はライナを出してやる。お前が逃がせば反逆者として追われることになるが俺が出せばそれはない。お前の力なら問題なく対処できるだろうが、追われる敵が減る。これだどうだ」

「分かった。乗ってやろう。しかしお前が王になるまでだな」

「……………」

「どうした？」

「いや、正直意外だった。即答じゃないか」

「まあライナを追う敵が減るのなら万々歳だ。まあライナが助けるのを拒む場合があるから暇になる可能性もあるし、それに……………」
「まあいいか」

「なにその含みがある言い方」

「まあいいじゃないか。エリス家に行くんだろ？　なら行くつか。善は急げってね」

そこでグラナはドアに向かって歩き出す。
ルシル・エリス。

グラナは彼が最初に会った時とどれくらい強くなったか興味があった。
「た。」

そしてどれくらい力を付けているか……………
グラナはシオンを残し、スタスタと歩く。

「待てよ」

その後を銀の髪で金の瞳を持つ青年が追った。

そしていち早く外に出たグラナはシオンが来るのを待つ。

そして雲一つない青空を見上げて言う。

「今から行けばすべてが始まる……………」

そう小さく呟いた。

12（後書き）

今回は少し踏み込みすぎたでしょうか。

熱中して書いていて気が付いたら書いてたんですがもう少し情報は小出しにするのが良かったかもしれません……まあそこは作者スタイルということでは。

後、ここおかしいんじゃない？ みたいなのが出てきたら言ってください。

僕が間違ってる可能性が高いので。

それと前書きにも書きましたが大伝説の勇者の伝説10巻が買えていません。

まじで悲しいです。もしかしたら新しい情報が出来て矛盾が生じるかもしれないので早く読みたいのですが……

アニメイトに行ったんですが売れ切れみたいなのでなかったですし

……

早く買いに行つてきます。

13（前書き）

こんにちは。

昨日中に更新するはずでしたがついに昨日、大伝説の勇者の伝説を買ったことができました。

というわけで昨日はほとんどそっちに専念していてなろうに来るのをほとんど忘れてたという訳です。

まだ見てない方もいるでしょうが、大伝10巻はもうすぐ伝勇伝シリーズの終わりを感ぜさせました。

まだ終わってほしくないですが……

レムルスがかなりの曲者ですね。

では直死の魔眼の兄の伝説13話へどうぞ。

「いつ来てもやっぱり大きいなあ」

銀の髪、強い意志のこもった金の瞳を持つ彼、シオン・アスタールはエリス家と呼ばれる謎に満ちた最強の名をほしいままに生きてきた一族の家の門の前で呟いた。

「だな……昔と変わってないな」

「ん……？ グラナ、昔ここに来たことがあるのか？」

「まあちよつとな……そんなことよりも行くぞ」

グラナはそうシオンを促す。

シオンは頷き、門を叩く。

「シオン・アスタールです。フェリスさんにだんごを届けに来ました」

そう言った次の瞬間、門が音を立てて開いた。
中から執事と思われる一人の男が出てくる。

「シオン様。ではまず道場へ」

そう言い、二人の半歩前を歩き出した。
それについて行き、道場へ通された。

「これは気に入られたかな？」

ここはエリス家の道場でしかもここは立ち入り禁止だそうだ。
シオンは始めてきた後は直接庭園に通されフェリスたちと会って
いたのだがなぜかまたここへ通された。

そのことからシオンは自然と言葉が出た。
その後ろで一つ音がした。

「なんだ、シオンか」

後ろには絶世の美女、フェリス・エリスが立っていた。
無表情で切れ長の目でグラナを睨み、シオンへフェリスは話しか
ける。

「誰だ？ こいつは」

グラナから視線を外すことなく、フェリスは問う。
そのフェリスからは警戒の色が見える。
グラナはその様子を見て、自己紹介をした。

「俺はグラナ・リュート。まあ訳合ってこいつの仲間だ」

「そうか……」

するとフェリスは興味なさそうにグラナから視線を外す。
その瞬間、強大な気配が道場の中心に表れた。

「ダメじゃないか、フェリス。そんな簡単に信じて警戒を解くなん
て」

異常なまで整った容姿、だがその体からは少し殺気を放っている。

だが顔は笑ったままで、エリス家当主、ルシル・エリスはグラナに話しかけた。

「グラナ君、だったかな……」

「そうだ」

グラナは頷く。

ルシルはそのグラナの様子を見て話しかける。

「君は……何者かな？　なぜかは分からないが僕の体が勝手に君を警戒している」

「別に何者でもないが……それに警戒する必要はないと思うが？
エリス家当主」

そこでルシルは少し考えるように無言になる。
その無言の後、ルシルは口を開いた。

「君は僕に一回会った事があるかな？」

「答える義務はない」

グラナは冷たく言う。

そこでルシルは、はははと笑う。

「ここはエリス家なんだよ？　当主の質問には答えてもらおうか？」

「拒否する」

「こんなことやっけていても時間の無駄なんだけどなあ……気になっているから君を殺せないし、まあ脅してもいいんだけど……そうだ、フェリスと君が戦う。君が勝てば何も言わなくていいがフェリスが勝ったら教えて貰おうか」

ルシルが笑ったままの顔で言う。

フェリスが反論しようと口を開こうとするがそれはルシルに阻まれる。

そしてグラナにどうする？ と語りかけるようにグラナを見る。

「分かった」

「よし。勝負は簡単、負けを認めれば負け。まあ力の差がありすぎたら僕が強制的に止めるけど」

フェリスは不満があるようだが頷く。

グラナも頷き、いつのまにか前にあった木刀を拾う。

フェリスの前にも木刀が転がっており、フェリスもそれを拾う。

「では、始め」

ルシルの合図で勝負が始まる。

その瞬間、フェリスがとんでもないスピードで動き、グラナの首筋に木刀を突きつけようとする。

グラナはその様子を見て、

「無駄なんだけどなあ……」

そう呟く。

そして自分の木刀を振る。

その瞬間、フェリスの木刀はバラバラになり、音を響かせ落ちる。フェリスの無表情が驚いたようになるが、次の瞬間グラナは逆にフェリスに木刀を突きつけた。

「お前の負けだ」

グラナは言う。

ルシルも、

「終わりだな」

そついう。

だがフェリスは、

「兄様、まだだ」

「ダメだよ。フェリス。力の差は歴然だ」

優しく諭すように言う。

その後、静かに座ったまま続けた。

「フェリスはもう少し修行が必要なようだ……グラナ君の話は諦めようかな」

「元からあまり興味なかったんじゃないのか？」

グラナは静かに言う。

「バレてたかな。けど少しは興味あったよ？ 君に警戒しているのは事実だ」

「だが自分よりは弱いから……という理由かな」

「そうだね……ではシオン君」

「はい」

「今から君に質問する。君が相応しいか判断する質問」

ルシルは表情を崩すことなく、淡々と続ける。

シオンは少し緊張しているような顔をしていた。

「だが、この質問をするに当たり、条件がある。これも質問だが答えが気に入らなければ殺す」

少しだけ殺気が漏れる。

しかし、とんでもなく条件が悪いなとグラナは思う。

ルシルの質問を受けるだけでシオンは命をかける必要がある。相応しいか判断し、気に入らなければ殺す。

ただそれだけだ。

シオンも同じことを考えているのか表情が硬かった。

だがすぐに笑みを浮かべた。

そしてルシルを見据えて言う。

「分かった。お前の質問を聞いてやる。ルシル・エリス」

底知れぬ闇を抱えた男が立ち上がった。

シオンはその様子を見て、どんな質問が来るかと身構えていた。そんな中ルシルは言った。

「ついてきなさい」

そしてシオンも立ち上がりルシルについて行こうとした。
その様子を見てフェリスが叫んだ。

「行くな、シオン。兄様に……そいつについて行くな」

シオンは振り返らない。

だがルシルは振り返り言った。

「フェリスは優しいなあ……だが彼は遠くまで行くと決めたんだ」

「シオンはお前と違う。異常な力を求めたりしない」

「でも力を求めているなくても彼が叫んでいるのは聞こえるだろう？」

「そんなの聞こえない」

フェリスは無表情のまま言う。

ルシルはそこで前を向き直し、冷たく言った。

「なら黙れよ。お前が関わっていい問題じゃないんだ」

ルシルはまた歩き出す。

シオンもそれについて行った。

「待て、俺からも言う事がある」

グラナも声をあげた。

またルシルは振り返り言った。

「何かな？ 邪魔するなら容赦しないけど」

「邪魔はしない。ただシオンに覚悟があるのか聞きたいだけだ」

そこでシオンも振り返った。

その金の瞳でグラナを見据えて言った。

「覚悟なら……ある」

「本当か？ そこに行けばもう後戻りはできない。すべてが始まってしまうがいいのか？」

「ああ。このままじゃ嫌なんだ」

そう言いシオンは前を向いた。

グラナはその後ろ姿を見ながら言った。

「ではエリス家の外で待っている。その後もやることがあるんだろう」

「ああ。よろしく頼む」

ルシルは興味深そうにグラナを見ていた。
そして言う。

「君、本当に何者だい？ こちら側の事情を知ってるのかな」

「さあな。エリス家当主、これで失礼する」

グラナはそういつと踵を返し、歩き出した。

ルシルも前を向き直し、歩き出した。

そしてルシルは呟いた。

「興味深いなあ。まあ殺してもいいんだけどまだ利用できそうだから生かしておいてあげるよ」

13（後書き）

俺はなにを考えているんだろう……

まだこの小説も始まったばかりなのに………

なんか新しい小説書きたくなっちゃいました。

また伝勇伝の2次作なんです、無性に書きたくなってきました。

どんな話にするかはほとんど決まっていて1話も完成しました。

学校の授業中にそれを考えてメモっていた紙を先生に取られるというハプニングがありました。が今は手元に戻ってきていて設定とかもどんな話で進んでいくのかも決まりました。

近いうちに出せたらいいなと思います。

この事は活動報告にも書くし、どんなのにするかも書くので気になる方は僕の活動報告へどうぞ。

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/129964/blogkey/196830/>

これをコピーして見てみてください。

できればコメントよろしくお願いします。

14 (前書き)

今回は短いです。

まあいつもですが……

「俺は……どうすればいいんだ!？」

エリス家の門の前門に背を預けながらグラナはそう唸る。
グラナが考えている事、それは――

「俺は帰ってきたシオン・アスタールをどうするべきなんだ？」

なぜなら今、シオン・アスタールは『アスルード・ローランド堕ちた黒い勇者』の力を手
に入れに行ったということは知っていたからだ。

シオンはライナの友達。エスタブルの時、ライナが命を懸けて
守りたいと言った友人の一人。

だが『アスルード・ローランド堕ちた黒い勇者』の力を持った者は必ず『ライナ寂しがり』の力
を持った、弟のライナの命を確実に狙って来る。

なら、兄として家族としてどうすればいいのか。

ライナの為にシオンを殺すか？

だがそれはライナの為になっているのか？

その思考がグラナの中をぐるぐると廻る。

「時間がない。だからシオンが狂っていないければ生かす。今は今の
王を引きずりおろすのが先か」

そう、時間がないのだ。

今の王が『ライナ寂しがり』を喰らう力をもうすぐつけようとしている。
だからシオンが『アスルード・ローランド堕ちた黒い勇者』の力を手に入れて王になれば
また時間を引き延ばせる。

「そうだな。今はシオンを王にする手伝いをするのがライナにとっ

て一番いい……」

そこでグラナは空を見上げ言う。

「だが、これは問題を先送りしているにすぎない。俺は、俺はどうすればいい？ 父さん！」

そう叫んだ。

すると後ろから人が近づいてくる気配がした。

グラナは急いで前を向いて真顔になる。

するとエリス家の門が開く。

そこからは銀髪で金の瞳を持つシオン・アスタールがそこにいた。その少し後ろにはフェリス・エリスも。

グラナは自分の迷っている心情を知られたくなくて少し顔をしかめる。

「どうかしたか？」

「いや、なんでもない。それよりシオン。次はどうするんだ？」

「クラウド・クロムを仲間にする。少し準備とかをした後だが、ついて来てくれるか？」

「ああ」

そう言いフェリスとは反対側のシオンの左後ろに立つ。

「じゃあ行こうか」

シオンがそう言った。

14（後書き）

まあなんか少し変な感じがしますがグラナの心情を書いてみたかったのでこの回をやりました。

ライナを守る上で障害となる『堕ちた黒い勇者』の力を持つシオンへの態度をどうするかを迷うグラナ。

これは最初から書きたかったのですがうまく書けたかは自分では分かりませんね。

お知らせ。

新しい小説を書き始めました。

伝勇伝の2次作です。

『変えた黒王の伝説』
です。

転生チートですが、チートは基本ほぼ使わずやるので見てくれると嬉しいです。

ぜひにじファンで『変えた黒王の伝説』で検索してください。

15 (前書き)

15話です。

「殺す前に話を聞けよ。クラウ・クロム」

シオンの目の前の男、クラウ・クロムはそれでも止まらずシオンの首を絞める。

そのままグツとシオンの首を掴み、

「聞く必要はない。お前はいつ殺してもいいという事になっていた」

そしてそのままクラウはシオンの首を力強く掴み、握りつぶそうとした。

しかし、シオンはそれに笑う。

死を感じてもへらへらと笑う。

そしてここから勝負だ。

そう思う。

この赤髪をシオンの味方にすることを、

自由に手足として動かすことができるものを手に入れるのにはここから勝負だと。

そして指をパチンと鳴らす。

それは天使を女神を呼ぶための前もって決めていた合図。

「動くな。動けば殺す」

クラウの横には容姿の整った、少女が現れる。

左手にだんごを持ち、時折そのだんごを口に運びながら、右手に持ったこの少女が扱えるとは思えない剣をクラウの首筋に付ける。それにとっさにクラウは振り返ろうとする。

そこへ女とは違う、少し低い声でまた後ろから声が響く。

「抵抗は無駄だぞ。諦めろ」

そしてもう一本の剣がクラウドへ向けて伸びる。
その剣の持ち主はグラナだった。

金髪に強い決意の籠った黒い眼に猫背。

その姿を見てクラウドは抵抗を止める。

殺気は消えない。それどころか増していく。
だが動かない。

動いても無駄だと分かっているから。

その反応にグラナは少し笑い、

「それでいい。それなら早く話が済む」

そして剣を腰にしまった。

フェリスの剣はクラウドに向いたままだが……

「ミラー先輩の勧誘を断ったくせに、この役に立ち無さそうな皇子
様に付いたのか」

「ははは。そうだな、こいつはミラーより能力は劣るが大切なこと
にいち早くちゃんと気づいた。だからな」

そこでクラウドは黙る。

そしてグラナはシオンに、

「話を始めろ」

「命令すんなよ……まあその通りだが」

シオンはニヤツと笑う。

こっちに主導権が向いたと言わんばかりにほほ笑む。
そして一呼吸おいて告げた。

「お前、俺の仲間にならないか？」

「……………はあ！？」

クラウは口を開けてシオンを見ていた。

シオンは何も言わない。

クラウの次の反応を待っていた。
だがそこでグラナが口を開いた。

「シオン、悪いが少し席を外す。めんどくさそうなのがいるからな」

「なにかあったか？」

「大丈夫だ。お前は気にしなくていい。こっちでやっておく、お前はそいつを勧誘してろ」

そしてグラナは闇へ姿をくらました。

そこでクラウが手を離れた。

「お前、なにがしたい？」

「ミラーの革命はこのままでは失敗する。俺はそれを横から修正してやる。そのかわりお前は俺の下に付け」

「馬鹿を言つな。ミラー先輩は完璧にやっている。それに調子に乗るなよ。お前と嬢ちゃんぐらい殺せるぞ？」

そしてクラウは動いた。

フェリスに向けて手刀を打つ。

それをフェリスは躲しながら剣をクラウに向けて放った。

それをクラウは右手で受けた。

だが腕は無事だった。

クラウの腕には剣の腹がぶつかっていた。

「何手加減してんだ？」

「本気になる必要がないからな」

「笑わせるな。本気になった所でお前の剣は届かない」

そしてクラウは後ろに跳ねる。

着地と同時に腕を動かしていた。

とても早く空中に魔方阵が描かれる。

「あれは義手なんだよ。求めるは殲虹>>光燐」

魔法陣の中央から光の槍が放たれる。

それはまっすぐフェリスの方へ向かって行く。

今から動いて間に合うようなタイミングではない。

だが、フェリスは無表情のまま、

「ん、問題ない」

そう言い、あっさり切り裂いてしまった。

そしてクラウに突っ込んでいく。

「なっ——！？ 光を切り裂くって化物かよ」

そう言いながらフェリスの剣を避ける。

そして激しい攻防を繰り広げた。

そこにシオンはこう言った。

「このままじゃ決着がつかないな、シウス。フェリスを援護しろ」

そして物陰から影が一つ飛び出す。

その者の姿にクラウは、

「あ”あ”！？ シウス、てめえ裏切ったのか」

そう言い動きを止める。

フェリスも動きを止め、その様子を見る。

「彼は裏切ってない、君をだがな」

「どつという意味だ？」

「そのままの意味だよ。シウスはクラウ・クロムを裏切ってはいない。彼は君に拾われたんだろう？　そこで君には忠誠を誓い従っている。だがミラーにはそれがない」

「てめえ、俺がミラー先輩の下に着いたのを気に入らないのか？」

そこで初めてシウスが口を開いた。

「いいえ。私もミラー先輩は好きですよ。だけど、シオンさんをもっと気に入った」

そこでシオンはニヤツと笑う。
あと一押しだな、とそう思う。

そして紅指のクラウ・クロムを口説き落とすための言葉を言う。

? ? ? ?

「で、そこでシオン達の様子を伺うルーク・スタッカートくん。なにをしてるのかな?」

グラナは一旦シオン達と別れたものの、そう離れた所には行っていなかった。

すぐ近くの所で止まり、闇を睨む。

そしてその言葉を言った。

すると闇から影が一つ出てきた。

「鋭いですねえ。シオン・アスタールを見張っていたのにいつもあなたはすぐに気づき私を撒く。厄介です」

「それはこっちのセリフだな。撒いたのにすぐにまた見つけられたらめんどくさい事この上ない」

「それは褒め言葉ですか?」

「そうなるな」

グラナは目の前にいるへらへら笑っている男を見る。
その男は白髪。おそらく軍の実験のせいだろうが。

そしてこいつは感情を失い、見返りに高い知能を手に入れている。
リユーラ・リユートルが目を付ける一人。

「で、見張りに来ただけか？ 邪魔するようなら殺すぞ」

「おおー怖い怖い。ですが殺されませんよ？」

「そこそこにある罠は意味を成さないぞ？ 壊れている」

そしてグラナは動く。

一瞬で仕掛けられた罠に近づき、壊す。

その調子ですべて壊し、元の位置に戻った。

「ばれてたんですか」

「その程度が分からないようでは守りたいものも守れないからな」

「そうですね……。で、まあ私の要件はシオン・アスタールが使えるか判断すること、それとミラーさんの伝言を伝える事です」

そうルークは言った。

その表情からは本当か嘘かを見破る事は出来ない。

表情に感情が見えないからだ。

こいつはずっとニコニコと笑っているからだ。

だがグラナは、

「そうか……ならいい」

そう言い踵を返す。

その方向はシオンが居る方向だ。

その方向を睨みつける。
そして、

「来たか……」

そう言う。

そしてもう一度振り返り、ルークを見ていった。

「早く用件を済ませて帰んな。人間はこの場に居れば死ぬぞ？」

「どういうことですか？」

「直に分かる。行け」

そう言い顎でクイツと『行け』と伝える。
するとルークは不思議そうな表情を作りながら素直にそれに応じた。

そしてルークはすぐに闇に消えた。
だがグラナはルークの居た方向から視線を外さない。

「父さんか」

そう呟く。

そう呟いた後、先程ルークが行った方向へ足を向ける。
そしてその方向へ歩きながらまた呟いた。

「こっちは女神。後ろからは父さんか……女神は分かるが父さんは何しに来たんだ？」

そう言いながらもグラナは戦闘態勢にゆっくり入りながら足を進

める。

その表情は鋭く、笑みが浮かんでいた。

15（後書き）

はい、という訳で、シオンがクラウドを口説いている所の後半はカットという事でね。

まあ長いし、クラウドを仲間にするという事実だけで他は要らないでしょという事で。

いや、いるだろ……と言う意見の方、いらっしやいましたら感想のところでご意見待ってます。

あれば次話はそこから始めます。

では、こちらで。

「そうそうクラウ。あなたにミラー先輩から伝言があります」

グラナと別れ、シオン達の方へ来たルークがクラウに親しげに少し警戒をしながらも話しかけた。

クラウはそれに、

「別に聞きたくもないが」

「じゃあ言いますね。ミラー先輩は『しばらくシオン・アスタールを泳がしていたが中々面白い動きをする。あいつを生かし、国民を煽るのもいいかもしれん。クラウを口説き落とせるほど優秀なら仲間にしてやつても……』……ですって」

「じゃあ先輩は……」

「それとも言うてました。『クラウがあつちに付けば結構の数が無効に流れるだろうからな。もしかしたら戦いが起こる。同じ目の奴が戦うなんて滑稽だし、トップなんて誰でもいい。俺でもシオン・アスタールでも。それに俺は王になる気はない。あいつを利用するのは一つの手だ。それだけのちからがあればだ』」

「で、俺を泳がし手の平で転がしてたって？」

シオンが少し皮肉気味に言う。

それにルークは、

「試されてたんですよ。私はシュリオ皇子の監視もやってましたが、

すぐに彼はいつ殺してもいいことになりました」

「で、俺はその眼鏡に叶ったってことか？」

「さあ？ 決めるのはクラウドです」

「俺は……」

クラウドは迷うように言う。

ここが命の瀬戸際だ。

そう感じながら、すぐそれがどうでもよくなってきた。
なぜなら少し離れた所に兄弟が現れたのを感じたから。
そこでシオンは言う。

「黙れ」

「ああ！？ 誰に口聞いてん……」

シオンは何も言わない。

何も聞かない。

それよりもやらなければいけないことをやる。

シオンは闇を見る。

すると頭の中で、

『始めるぞ、シオン。 ついに始まる。 狂った物語が幕を開ける』

ルシルの声が響く。

その間にも兄弟が近づいてくるのが分かる。

そして、

「逃げる。みんなを連れて逃げてくれ」

そう言う。

クラウドは訳が分からないという顔をして、

「何が言いたいん……」

そこでクラウドの声が止まる。

なぜなら、なにか光ったと思った次の瞬間、その光にクラウドが呑み込まれてしまったから。

あれは魔法ではない、そう思う。

発動を感じさせず、クラウドを吹っ飛ばす。

そんな魔法存在しない。

それにルークは少し遅れて反応し、

「クラウド……」

そう言いかけるが、彼の方へも光が放たれ、ルークは慌てて躲す。

「なにこれ……クラウドが一発って……シオンさん、一旦逃げまじょう」

そしてルークはシオンの方を見て、

「その顔……シオンさんのお知り合いですか？」

それにシオンが首を振る。

そして答える。

「いいや、違う。だが来るのは知っていた」

「私たちが気づかなかったのに？」

「いろいろあるんだよ」

「私、予想ができない戦いは弱いので、逃げた方がいいですかね？」

「ああ、みんなをつれて逃げてくれ。俺は……話し合って来るよ」

「ご冗談を……」

そしてシオンは笑みを浮かべる。

全く余裕の感じられない笑みを浮かべる。

「本気さ。死ななかつたら俺を仲間にしてくれよ」

「これを切り抜けたらクラウの意見なんて関係なく仲間になりますが無理でしょう？」

「さあ？」

「まあ、私は逃げます。……そうそう、この事はグラナさんも関わっているのですか？ 彼にもさつき会いまして、『逃げる』と忠告されてたんですが……」

「グラナが？」

「あ、知らなかったんですか。まあ逃げます」

そしてルークはシウスとフェリスを担ぎ走り出す。

その姿を追うことなく、闇に顔を向ける。

「シオン。『女神』が来るぞ」

「分かっている」

「だがそれとは別に……」

「なに？」

「赤髪の男を吹っ飛ばした魔法を放ったのは別の奴だ」

「え？」

「別の奴だ。おまけに人間じゃない」

「ははは、まじかよ」

だがもう、狂った物語は始まってしまった。
あきらかに人間じゃない奴が来る。

後ろから現れたのは……？

？
？
？
？

「よお、シオン」

グラナが闇から姿を現す。

シオンは明らかにびっくりしていた。

それを気にせず、グラナはシオンへ近づく。

そこで異常なまでに容姿が整った、美しい金髪を持った男、ルシルが姿を現す。

シオンとグラナの間に割って入るように立つ。

そしてルシルが口を開いた。

「あれは君が放ったのかい？」

「違う。俺はあんな魔法使えない」

「本当かい？」

「本当だ」

「まあ信じてあげよう。君はあきらかに人間だから、あんなことできるわけないしね」

「そうだ」

「じゃあもう一つ質問」

「なんだ？」

「僕が初めて君にした質問。……君、何者だい？」

そこでグラナは黙る。

答える必要がないからだ。
もうこの問いには答えた。

『別に何者でもない』

あの時答えた答えに嘘偽りはない。

自分はただの人間。ただ一人の男の子を、家族を、弟を守りたい。
それだけを持つ、ただの人間。
だから黙る。

「じゃあ質問を変えよう。君はこちら側の事情を知っている？」

「……少しな、だから今シオンが『^{アスルド・ローランド}堕ちた黒い勇者』の力を持った
のも、ルシル、君が『^{エリス}悪魔』別名、『すべての式を編むもの』の力
を持っているのも知っている」

「そうか……今は時間がないからこのくらいにしよう。だが、君は
どうする？」

「俺は人間だ。あまり期待しないでくれよ」

グラナは少しニヤツと笑う。

そしてグラナの眼が闇の一点を見た。

「来る」

そう言った。

次の瞬間、闇から手が伸びる。

その手はシオンの方へと伸びる。

それにシオンは反応できないが、ルシルは動いていた。

「私の主には触れさせない」

ルシルがシオンと手の間に割って入り、手を掴む。

そしてシオンとルシルはその手の持ち主を見ようとす。

それは一人の人間。

シックな黒いスーツ、体つきから分かる性別は男。

その顔には仮面が付いていた。

『中々の反応だ。ルシル君』

「何者だ？」

『救世主さ』

「……御託はいい。どうせ敵なんだろう？ 時間がないから殺ろ…

…」

『無理だよ。君の力では』

そして男が手を掲げる。

すると手の平が光る。

その光を切り裂こうとルシルは手刀を放とうとする……が、それは失敗する。

「これは罠だ」

そう言い、ルシルの体を突き飛ばし、グラナは男とルシルの間に割って入り、男の手首へ剣を入れる。

手首はこれで普通飛ぶ。

だがグラナの剣は煙を斬るようになにも斬れなかった。
だがそれもグラナの計画。
それで良かった。

グラナは目を見開き、見る。
そして光へ向かって剣を振るう。
するとその光は消滅する。

『さすがグラナ。強くなったね。だけど……それじゃあ全然足りない』

そして男は人差し指をグラナに向け、なにか呟く。
すると指の先から糸みたいな細い物が飛び出し、グラナを縛る。

『グラナはまた後で。それよりすることがある』

そして男はルシルの方を見る。
そこではシオンとルシルが話している。

「で、ルシル。あいつに勝てそう?」

「ああ……少し油断しただけだ」

「あいつ強そうか?」

『すごく強いよ』

そこで男は話に割って入る。
だがその答え方は気の抜けるような話し方だった。

『そして、今の僕に勝てないレベルじゃ、君らは『女神』と戦った

らすぐに殺されてしまう。まあグラナが手伝えばそここの戦いは出来るだろうけど、今の君達じゃあっさり死ぬ。それを止めに來たんだ。何を焦っているのかは知らない。だけど……身の程を知ろうよ。君はまだこっちの世界に足を踏み入れたばかり、それで僕と戦おうだなんて……」

すると突然、

『千年早い』

と、ルシルの横で声がする。

まだ目の前に仮面を付けた男はいるのに、ルシルの横から声がする。

シオンはそちらを見る。

するとすぐ横に男は立っている。

シオンが声をあげようとするが、もう遅い。

男の手がルシルを掴み、地面に押し付けようとする。

だがルシルもやられてばかりの訳もなく、体を切り裂こうとするがグラナの時と同様、煙を切り裂いているようにすり抜ける。

シオンが動こうとすると男は下で音を鳴らす。

どつという原理か、シオンは動けない。それに声も出ない。

『ほらね。君たちは手も足も出ない訳だ』

「殺す」

ルシルは呟き、両手を合わせ呪文を唱えようとする。

『魔法で勝てる訳ないよ。それは僕が創った魔法。君に教えてあげた魔法だよ』

男も何やら呪文を唱える。
するとルシルの魔法は消滅する。

『無駄だよ……。君がいる所はまだ浅いから。君が何をしても届かない。もっと深く、泣き叫んでもその声が届かないくらい深い闇の底へ来ないと……』

そこでルシルが言う。

「何者だ」

『それが分からないほど、君は弱い』

「……………」

『だから助けに来てやった。もしかしたら役に立つかもしれないし。それに……守りたかったしね』

シオンもルシルも何も言えない。

『さあ逃げるといい。今回現れた『女神』は僕がなだめよう。その間に力を付けるといい。この国の王がライナを喰らう力を付ける前に』

そう言い、男はルシルを離し、立ち上がる。

そこへグラナが飛び出していく。

『ん？ グラナ、本当に力を付けたね。昔の君なら『眼』があっても糸は切れなかっただろうに』

「そうだな……普通の糸でやってくれたら腕力で千切れたのに、魔法で斬れないようにするからめんどくさかったよ」

『じゃあ僕は行くよ』

すると男の体が数百枚の紙へと変貌していく。
少し離れた所にいつの間にかおかれた書類カバンへと紙は収まって行った。

だが一枚の紙がグラナの前にゆっくりと降りて行った。
グラナの前に落ちた紙をグラナは拾い、内容を見る。
そこに書かれていた内容を見てグラナはシオンとルシルの方を見る。

「俺は少し用事が出来た。だから少し行く。シオン、明日はどこに行けばいい？」

「エリス家の前で」

「分かった。じゃあな」

そしてグラナは闇へと向かって歩く。

そしてある場所へと向かった。

グラナが闇へと消えた後、ルシルは悔しそうに呟いた。

「どうやら私の記憶はいじられているようだ」

「だがそれは後だろ。女神が……」

シオンの言葉は止まる。

なぜなら、今までであった、なにかが襲いかかってくるような圧迫感や焦燥感はない。

誰かが女神を止めたのだ。

誰がやったのかはわかる。あの仮面の男だ。

あの男がとめるとグラナは分かっていた。

だから、グラナはシオン達を残して行った。

グラナは約束などそういったものは忠実に守る。

そう言う男だ。

それがシオンにはこの数日で分かってきていた。

だが、男が止めたのが分かったのは先程だ。

グラナが言った後。

だがグラナは行った。

それと、あの仮面の男との会話。

そこから分かるのは……

「グラナはあの男の事を知っている……」

シオンは呟く。

それにルシルも頷き、

「何か知っているな。まあそれはまた明日聞けばいい。それより力を完成させないと」

「なら今の力は不完全な訳？」

「ああ。君の中の力、アスルド・ローランドの力は、この国に住む呪い『人間α』共に認められるたびに解放され、強大になって行く。だが今は民は皆王族に心底屈服している。君に忠誠を誓う者は少ない。つまり……」

「俺が追うと知られば、力は強くなる？　これはそう言う力か」

「そう言う呪いだ。『勇者』を恐れた『女神』が掛けた呪い。それを解くのが君の仕事だ」

シオンはルシルの説明が理解できていなかった。

だが、聞く必要はない。

こいつとは長い付き合いになることが分かっているのだ。
ゆっくり聞いて行けばいい。

「今日はもう何もないな。なら、私は少しここを離れる」

「どこへ？」

「失われた記憶を取り戻しに」

瞬間、ルシルの姿は消える。

気配も痕跡も残さず消える。

それにシオンは溜息を吐いた。

周りにいるのは化物ばかり、自分も含めて……

それにシオンは笑みを浮かべる。

そこで後ろから声がする。

「あら、生きてた」

人間の声。

この国の闇に潜むものではなく普通の人間。

ルーク・スタックートの声だ。

だからシオンは振り返る。

「戻ってきたのか」

「ええ。ミラーさんにあなたを助けるよう言われたので」

「で、どうだった？」

「ミラーさんはあなたの作るシナリオに入るそうです。この国が別の歯車で回っているならそちらに合わせると」

「ははは。ミラーは優秀だな」

そうミラーは優秀だ。

おそらく彼はここで何が起こったかは知らない。

分かっているはずなのに、何かを感じ取ってシオンを仲間に取り入れる事にした。

「で、教えて頂けませんか？ 何が起こったのか、このおかしな国はなんのためにあるのか」

「詳しい事は知らない」

「嘘でしょう？」

「拷問するか？」

「まあいいです……」

「それより明日、会合を開く準備をしてくれ。俺を認めさせるための」

「おもしろくなってきましたねえ」

「じゃあよろしく頼む」

そう言い、シオンは歩き出した。

？
？
？
？

空は暗い闇から少し白みが差して、朝が近いことを告げた。
グラナはその空を見上げて呟く。

「やはり、遠いな。もう朝だ……時間には何とか間に合ったが」

そう呟く。

そしてある人物を待った……。

16（後書き）

次話は原作にはない話です。

やっと物語が進んでいく気がしてきました。

お気に入り登録、感想待ってます。

17（前書き）

……更新遅れました。誠に申し訳ありませんでした。

主に現実、リアルの問題で。

色々忙しく、小説を書くこうという気分になれずにいました。

では17話です。

その日、グラナは悲しい夢を見た。
それは、失ってしまった過去の記憶。
もう二度と戻る事のない、過去。
大切な物はすべてそこにあった。
父が笑い、母が笑い、弟が笑う。
その笑顔をみて、自分も笑う。

グラナはベッドから身を起こす。
そして、自分の目から涙があふれているのに気づき、目を拭う。

「……父さん、ライナだけは必ず守る」

グラナはそう言い、首から下がる、十字架の形をしたネックレスを握りしめた。

? ? ? ?

「間に合ったがもう朝だな……」

グラナはそう呟く。
空は白み始め、朝を迎えようとしていた。
そこで、グラナはある人物を待つ。

父、リユーラ・リユートルーだ。

そしてグラナは静かに目を瞑る。
そして呟く。

「父さんはなぜここを……？」

ここは、旧リ्यूトルー領。

グラナが『弟だけは命に代えても守って見せる……！』と叫んだ所。
楽しい記憶と悲しい記憶が眠る場所。
そう思っていると、気配が一つ、グラナの前へ現れる。

「父さん……」

グラナは目を開ける。

そこには自分に瓜二つの男がニコニコと笑顔でこちらを見ている。

「久しぶりだね、グラナ」

「何の用だ？」

「何の用だ……ってひどいなあ。親が子供に会いに行くのに理由なんているのかい？」

「もう少し、親らしいことしてから言えよ。で、本当の所は？」

「親らしい事をしに来たんだよ？ 用件は二つ。君に新たな情報を教えるのと、力をあげる」

「ほう……」

グラナはリ्यूラを真っ直ぐ見据える。

ライナと同じようにやる気と言つのが少し感じられないが、その眼には強い光をたたえていた。

「まず情報だけど……君の、『眼』の事だ」

「これか……」

グラナは目を抑える。

そこには何の変化も見えない。
あくまでパツと見だが……。

「君の目は、線と点が見える。そうだね？」

「ああ、前言った通りだ」

「そしてその線や点を斬ると、その物体が簡単に斬れたりする」

「そう、硬さがなくなる……みたいな感じだ。どんなものでも豆腐のように斬れる」

「だが、その線や点が見えない物もある」

「そう」

「そして僕はこの事を調べてきたんだよ。おそろくだが、その眼はこの世界の物ではない」

「……！？ どういうことだ」

そこで、少しグラナは首を傾げる。

リユーラはニコニコとした顔を崩さないまま、こちらを見ている。

「まあ僕もはつきり言っただけでもないんだけどねえ……。さっきも言っただけにこの世界の物ではないという事はこの世界にほとんど情報がないというのと、なにも分かりようがないという事なんだよ。だからこれから僕が話すことは真実じゃない。僕が勝手に思っただけに仮定を立てただけという事は分かってね？」

「分かった」

「よろしい。じゃあまず、君が見える線と点はそこを断つと死につながるという事から『死線』『死点』と名付けて話を続ける。まず死線と死点は君がさっき言ったようにそこを断つときは硬さがなくなる。硬さが関係なくなるといふ事でいいと思う。君がこの能力に目覚めたのはライナが『複写眼』に目覚めた時と同じ、つまり『複写眼』と同じように後から現れるタイプの魔眼か、もしくは後でその能力に目覚める『超能力』といったもののどちらか」

「超能力？」

「そう、確かなことが分からない限りそう表現するしかないね。まあ僕としては超能力の方が魔眼より正しいと思う」

「なんで？」

「これを使った後、グラナは頭が痛いと言っていたよね？ 眼と脳がワンセットでその眼は成り立っているんだろ。まあ今の君は少し長い間使っただけでも平気なようだけど、使いすぎには気を付けてね」

「もうそれだけか？」

「今のところは。だけどこれは分かっている事だけだから、もっと違う能力が隠されているかもしれない。グラナにはこれからそういうところも気を付けてもらいたい。自分の武器を正しく把握することとは生き残る上で大切なことだから。」

けどこの『眼』に名前がないのは不便だね。じゃあ『直死の魔眼』
とでも名付けようか」

リユーラはそう、優しい顔で言った。

「なんで魔眼なんだよ……。魔眼じゃないんだろ？」

「そうだけど。この状況を表すのにぴったりの言葉ってないと思う。眼なんだし特別な力を持っているのも確かなんだし魔眼でいいんじゃない？ もしグラナが『眼』の事を話す時が来ても超能力より魔眼の方が分かりやすいとおもうんだけど」

「それもそうか」

グラナは言いながら頷いた。

「いい子だね。次に君に力をあげる。グラナはこのままだと死んじやうからね」

「死ぬ？ 俺が」

「そう。後、数年は大丈夫だろう。だがルシル君が力を付ければ……女神がライナを狙えば……。色んな危険が待ち受けるだろう。君は人間程度には負けないと思うけど、化物が襲ってきた時、下手を

すればライナを守れず自分も死ぬ。『人間の限界』だ」

「『人間の限界』……」

「そう。下級の女神程度なら君の力を駆使すれば勝てるが、人間ではそこまでだ。どう足掻いても無理だろうね。けどグラナまで人間を止めなくていい。これはあくまでも保険だし、特にライナが力を付けた後は色んな化物がライナを狙う。ライナはあの力を好き好んで使えない。なら守るのはグラナだ。お兄ちゃんだからね。それに誓っただろう？ ライナを守ると。そのための力をあげる」

「そうだ。俺は誓った。あの日、あの時間に。父さん力をくれ。ライナは守って見せる」

グラナがそう言うと、リユーラはポケットを探る。
そしてネックレスらしきものを出した。

「これだよ」

そう言いリユーラはグラナに渡す。
それには先に剣の形をしている物が付いており、その剣には古代語のような文字が書かれている首から下げるタイプのネックレスだった。

「これか？」

「そう、ルールフラグメ、グランディオーン 忘却欠片、覇王の剣だ」

「『グランディオーン 覇王の剣』………」

「この剣の能力は特にない」

「はあ!?!」

「特徴がないのが特徴だな」

「マジか……」

「というのはもちろん冗談としてこの剣は”決して折れる事のない剣”なんだよ。そしてこの剣をつかえたものは今まで誰もいない。これを創ったのは司祭だ。司祭が人間に与えた忘却欠片。だが誰も扱えたものがいない。だからある神殿の奥深くに封じられそのままだったのを取ってきた。この剣は認めたものしか扱えない。決して折れることなく認めたものしか使えない剣。それ故に『霸王の剣』。これを扱えれば世界が取れるとの言い伝えもあるぐらいだ」

「それは……俺に向いてそうな剣だな。俺の眼とも相性が良さそう
だ」

「けどまずやるべきはこの剣を屈服させる事だよ」

「分かってる。どうすればいいんだ?」

「それは簡単。ルーラゲメ忘却欠片を使うのには合言葉みたいなのが必要なのがあると言ったろう? これはそのタイプ。『すべてを切り裂く霸王の刃よ。力を解き放て』と言って発動できれば剣に認められたのと同じ。これからいつでも使えるよ」

「意外と簡単なんだな」

「そうだけど、認められた者はいないんだよ？」

「大丈夫だ。問題ない」

そう言い、グラナは手に持つそれを握りしめる。
そして、発動させるための言葉を言う。

「『全てを切り裂く霸王の刃よ。力を解き放て』」

……………。

「何も起こらないんだが？」

「あれえ〜？ グラナならできると思ってたんだけど……………」

「まあいい。時間をかけてでも屈服させる」

「その意気だね。あと、渡すのは……………」

そう言い、リユーラはまたポケットを探る。

その中から今度は見たことのある忘却欠片ルフラゲメを取り出した。

「魔獣消しエルアムスに寄神虫ユーロス・エルマ、そして死の転移デルニオか……………」

「そう、魔獣消しエルアムスに寄神虫ユーロス・エルマがそれぞれ3つずつ。死の転移デルニオが1つ。
何があるか分からないから持っていて損はない」

「……………ん。貰っておく」

そう言い、手を前にだし受け取る。

そして受け取ったそれをポケットへとしまふ。

「なあ父さん。これを、エルアムス魔獣消しシオン・アスタールの前で零距离で撃つたらどうなる？」

「ルシル君に防がれて終わりだね」

「そうか……」

「けどグラナはそんなこと考えなくてもいいよ？ あの前物の事は僕が対処するから」

「そうだが……もしもを考えてな」

「……グラナ。大丈夫かい？」

そうリユーラが突然言った。

グラナのことを心配するような目で、労わるような声で言った。

「何が？」

「……大丈夫ならいいんだ」

そう言うものの目は変わっていなかった。

グラナはリユーラが何の心配をしているのか分からず自分の体を見る。

どこにも怪我はない……。

体調も悪いわけではない……。

自分を見ても心配する要素がない、そう思う。

「じゃあ、父さん。俺はもう行く。シオンとの約束もあるしな」

「……ん。彼が王になるのを手伝ってあげてね。ライナの為に」

「分かっている」

そう言つとグラナは父に背を向け歩き出す。

そしてグラナが少し離れた後、誰にも聞こえない小さな声でリュ
ーラは呟いた。

「グラナ……。本当に大丈夫かい？ 僕には君が……。疲れ果て、
心が弱っているように見えたけど」

そう、親が子を心配するのと何ら変わりのない声で、口調で呟い
た。

17（後書き）

次話は頑張って早く更新できるようにします。
まあ夏休みになったのでね。

それと、前書きに書いたような状況下でしたので色々変な気分で書いたものもあるかも知れないので修正するかもしれません。

では、感想お待ちしております。

18（前書き）

前回の話で堕ちた黒い勇者の物語で繰り広げられたところは終わります。

今回は、次に入る為の話なので短いです。

グラナがリユーラと会った後、脱兎の如く年が過ぎていった。
シオンが王になるまで、それは激動の二年だった。

ミラーやクラウ、カルネやらの活躍もあり、革命は意外とすんなり行われた。

しかしその間、グラナの忘却欠片『グランディオーン覇王の剣』は本来の力を現すことが無かった。

本来の力——。と、いうことは力は目覚めては来ている。
形態変化。グラナの剣になってから数か月の事、それは起こった。
しかし、その剣にはなんの力も感じられないのだ。

ただの剣。そう言わざるを得ない。いや、特別な能力はないと聞いてはいたがそう言う話でもない。

『グランディオーン覇王の剣』を持っていても、普通の剣を持っているのと何ら変わりがないのだ。

そんなことありえるだろうか。

いや、否だ。特殊能力がないと言っても仮にも忘却欠片ルララゲメなんらかのアクションがあつていいはずだ。

これが父が与えたかった力なのか。疑問を抱かずにはいられない。
しかし、それでもいいかなとグラナは思っている。

この剣はネックレスから剣へとその形を変える事ができる。そう
なると武器を持っていないと油断させることが可能になり、相手の
判断が一瞬ブレる。

その一瞬がライナの命を左右する。それだけでもグラナには十分
だった。

それに『グランディオーン覇王の剣』は今の所折れるどころか刃こぼれもしていないのだから。

「――グラナ」

「んっ？」

そう言っで声をかけてくるのはフェリス・エリスだった。
異様なまでに整った容姿。金髪碧眼。

その彼女は、少し親しげにグラナに声をかけた。

「シオンからの忌々しい命令だ。行くぞ」

「珍しいな。フェリスがシオンの命令をすんなり聞くなんて」

「それは違う！ あの悪逆非道の王め。ウィニットだんご店を潰すぞと言っできおったのだ！ そうこられては私は……奴の命令を聞くしかなかったんだ」

いつもは無表情な彼女にしては珍しく、少し感情を表に出している。

これは、慣れだろうか。最初に会った頃には分からなかっただろう。

それにグラナは、苦笑気味に答える。

「それはいつも通りの展開だな。じゃあ行くか」

「うむ。という事で行くぞ」

そう言っで、無表情に戻りグラナを待つようなことせずにさっさと行っってしまった。

「フェリス。待てよ。まだどこに行くか聞いてないぞ」

「ああ。それはお前の弟だとかいう変体色情狂の所だ」

「……ふーん。やっとライナを出してやれる」

そしてグラナは急いでフェリスの後を追った。

18（後書き）

速めに次話出します。

なんか誤解されそうなので言っておきますが、グラナは人間に興味がないとかではないので、今回の話みたいにフェリスに軽い感じで話したりはしますよ。

グラナのメーターでは

ライナ>>>（越えられない壁）>>>両親、自分>>>（越えられない壁）>>>友人>>>その他有象無象

です。ということは友人とは仲良くします。

グラナはライナにしか興味ないただのブラコンBLヤローではないのです。

では。

19（前書き）

更新遅れました。
まじすみません。

進まないのに少し理由があります。
という訳で後書きでアンケートを取ります。
たくさんのお意見下さい。

そこには光が届かない。

日の光も月の光も。

だから今は昼なのか夜なのかも判断できない。

そんな場所でもライナは変わることなく過ごしている。

ライナはいつものように、

「おっさん、おはよう」

そう挨拶をする。

ライナにあいさつされた男……看守はいつもと違い暗く、沈んだ表情で立っている。

「どうしたおっん。……さては奥さんと喧嘩したな？」

「……………」

看守は暗い表情のまま無言で、どう言おうか言葉を探しているような感じだった。

その姿を見てライナはすべてを理解する。

「そうか……。俺の死刑が決まったんだろ？」

「……そう、だ」

それを聞くとライナは壁で遮られて見えるはずないが外を見るように壁に目をやる。

「兄さんどうしてるかなあ……」

看守に聞かれることが無いように声を調節しながらライナは呟く。
兄さんに会うためにも、約束の為にも俺はここで死ぬわけにはいかない。

ここで逃げるという手もあるがおっさんに迷惑がかかる。
ここは、おっさんと別れてからの方がいいかな。

そう思いながらもライナは看守に言う。

「おっさん。俺、逃げてもいいか？」

「それは……俺にも」

「分かってるよ。言ってみただけだ」

ライナはそう軽く手で制して看守の言葉をきった。
そしてライナは看守に連れられ、監獄を出た。

？
？
？

私は今、囚人を待っている。

その囚人の名前はライナ・リユート。

「なぜ私がこんなことしなくてはならない」

軽く王に悪態をつく。
シオン

そう彼女は囚人を王のところに連れて行くという事よりだんごを
食べてのんびり過ごすつもりだったのだ。

だが命令で囚人を待っている。

王の言うところによるとそいつはグラナの弟らしい。

私はそいつの力を見極め、使えるようなら連れてくることだ。

グラナも来ているがあいつはうまく気配を消してどこにいるのか
分らない。

こんなのはいつ振りだろうか。
フェリスはそう思う。

絶対に勝てない。
そう思ったのは。

いや、兄様は例外だ。あの人は色々違う。
グラナは兄様と違い、変な感じはしない。
だが勝つことはできなかった。

エリス家の人間として鍛え上げられてきた自分は一族以外の人に
劣るなんてこと経験がなかった。

そう持っている内に、むさくるしい顔をした男たち数人が眠そう
な顔をした男を連れていた。

眠そうな男の横に看守が居る事からあいつがライナ・リユートだ
ろう。

さっさと終わらせることにしよう。
そう思い、フェリスは男たちに声をかける。

「ん。その間抜け顔がライナと言う犯罪者か？」

？ ？ ？

グラナは手に持つ資料へと目を向ける。

そこにはお世辞にもキレイとは言えない字が書かれている。

『昼寝王国を創るためには？』そう始まるレポート。

グラナが持つのはシオンからさつき借りたものだ。

「ライナ……。この力はそんな簡単な物じゃないんだよ。うまく使えれば戦争はなくなるかも知れない。だけどこれを扱うに値する人物は……いない。そんな事ができる王は今はいない」

グラナはそう呟く。

おそらく、というかシオンは絶対にライナを忘却欠片ルフラグメを集めさせる。

ライナは平和を創るにはどうすればいいか、自分なりに考えレポートを書いた。

だがグラナは甘い。そう思う。

誰がその力を使って平和にする？ ライナは無理だ。まずこれをするには忘却欠片ルフラグメの力を見せつける必要がある。つまり人をそれで殺すという事。

そんなことライナには出来ない。というよりさせない。

シオン？ ダメだ。今は良いがシオンは後々……。アスルード・ローラ堕ちた黒い勇者ンドを強くするための力を与えてはならない。

北の勇者。ガスターク帝国の王。レファル・エディアか？

今はまだ有名でもないし、勢力を拡大しているらしい。レファル・エディアは司祭から手に入れた力、再生の剣グロウウィルという力を持っている。その力はライナの中に眠る力。寂しがりライナの力、すべての式を解く者の力を解放した時と同等並みの力を持つと父さんに聞いた。

その力を用いて彼は平和を創ろうと考えているらしい。
だが、ダメだ。彼らは司祭の手で踊らされている可能性がある。
いや、その可能性が高いだろう。

他の王は言うまでもない。そんな力を手に入れば私利私欲の為に使うにきまっている。

そんなことをさせればライナが悲しむ。

よってその力を使うに値する人物はいない。

だからライナの考えは素晴らしいが穴が多すぎる。

これでは成功しないだろう。

それでも、

「ライナの夢は手伝ってやりたい」

その為には。

その力を扱って平和へと導く人物を探さないといけない。

ライナが見つけた忘却欠片^{ルフラグメ}をシオンなど、他の王に渡してはいけない。

「色々忙しいなあ」

グラナは資料を置き、部屋を出た。
明日はライナを迎えに行く時間だ。

19（後書き）

キタア
（ ° ） （ ° ） （ ° ） （ ° ） （ ° ）
！！！！！！

アンケートだあああああああああ！！

とまあこんな調子ですがアンケートを取ります。
内容は……………。

『ヒロインを誰にするか？』

ということなんです。

これずっと考えてたんだよね……………連載始まる前から。
まあもうちょいあとだしっか。と言う感じで始めるましたがいまだに決まってません。

この辺で決めないとライナのヒロインがどうなるかわ変わってきますし……………。

という訳で皆さんの意見を聞かせてください。
できればたくさんの方の意見が聞きたいです。

一応ある程度候補はあげておきます。

候補内であればそのルートの構成は出来ているので話を進めやすいですが……………。

- 1．フェリス・エリス（ライナに会う前から知り合っているのだからに行くかと）
- 2．キファ・ノールズ（ライナから乗り換えるという事になります）
- 3．ミルク・カロード（過去のフラグはライナではなくグラナがたてたという事で）

- 4 .ピヲ・メンテ（死なずにグラナが助ける）
- 5 .ライナ・リユートww（何かの拍子にTS的展開に？ もしくはBLルート）
- 6 .エスリナ・フォークル（どうにかしてww）
- 7 .ノア・エン（どうにかしてww）
- 8 .オリキャラ

こんなものかな？

この中になれば大体考えてます。

別にこの中になくてもいいですよ。

たくさん意見できれば頂きたい。よろしく願いします。ヨロシク>（――＊）X（＊――）<ヨロシク

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1139s/>

直死の魔眼の兄の伝説

2011年9月13日02時05分発行